

インダス・プロジェクト  
ニュースレター



## インダス・プロジェクト ニュースレター

第5号

2009年6月30日発行

### ごあいさつ

インダス・プロジェクトも、この4月で本研究（FR）3年目に入りました。この4月から遠藤仁さんが新しく研究支援員として赴任しました。遠藤さんは高校時代から考古学に関心を持つ考古少年だったそうです。世界各地で発掘を行ってきた実践考古学者で、本プロジェクトでインドでの発掘に従事していただいただけではなく、エジプトやシリアでも発掘の経験があり、またコンピューターにもつよい即戦力が期待される人材です。赴任早々、このニュースレターを担当していただいています。

ニュースレターはプロジェクトメンバーからの投稿になっています。今回は昨年度の研究活動報告を寄せていただきました。なかには、論文のような力作を寄せてくださった方もいますが、ニュースレターは基本的に活動報告を自由闊達に書いていただければ幸いです。

今回特筆すべきは、長年エジプトの発掘に携わっておられる近畿大学の高宮さんにご投稿いただいたことです。随所にエジプト文明との比較が述べられていますが、かなりその違いに興味を持たれたようです。ミニチュア嗜好のインダスと大きな物好き嗜好のエジプトを比較されているのに、「なるほど」とうなずかされました。エジプト、メソポタミアとインダスとの比較なども今後は視野に入れてプロジェクトを進めていきたいと考えています。

プロジェクトの活動としては大きなイベントがありました。5月29日には発掘報告会を、続いて30・31日は佐藤プロ、ハーヴァード大学との共催でラウンドテーブルを開催しました。多数の方にご参加いただき、ありがとうございました。

なお、インドの2カ所での発掘は昨年度で終了いたしました。本年度からは発掘報告書作成に向けて、分析に重点をおいて研究を続けていきます。本年度は古環境

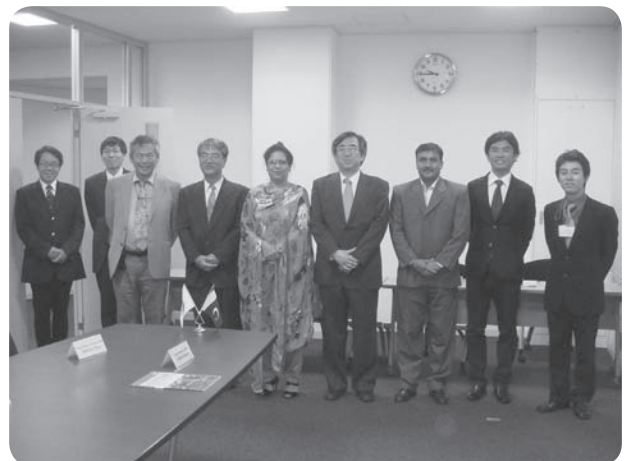
復元研究グループのネパール、ララ湖での湖沼コア採集が行われます。その分析結果は本プロジェクトの行方を握っていると言っても決して過言ではありません。乞うご期待。

プロジェクトリーダー  
長田俊樹

### シャー・アブドゥル・ラティーフ大学との MoU 締結のお知らせ

インダス・プロジェクトではパキスタンのシンド地方での考古学調査を実施するために、パキスタンのシャー・アブドゥル・ラティーフ（SAL）大学のQ.H. マッラー（Mallah）博士を2007年4月から9月までの5ヶ月間、招へい外国人研究員として招き、共同研究を進めてきました。また、SAL大学はシンド地方で踏査や発掘などの考古学調査を精緻に進めており、その成果の一部はOccasional Paper 誌上でマッラー博士にご報告いただいています。

そこで、本プロジェクトではパキスタンでの調査をさらに進展させるために、6月5日にSAL大学との間



シャー・アブドゥル・ラティーフ大学との MoU 締結



N. シェイフ博士の講演風景

で MoU（研究協力に関する覚書）を締結いたしました。SAL 大学からは学長のニローファー・シェイフ（Nilofer Shaikh）博士と同大学教授のマッラー博士が来日されました。MoU 締結後には、シェイフ博士に同大学が発掘調査を実施しているインダス文明の都市遺跡ラーカンジョダロ（Lakhanjodaro）の発掘について講演していただきました。また、併せてウィスコンシン大学の J.M. ケノイヤー（Kenoyer）教授にもインダス文明のユニコーンについて発表していただきました。

今回の MoU 締結により、SAL 大学とのパキスタンにおけるより一層の調査連携が可能となりました。今後の調査成果にご注目ください。（遠藤 仁）

## インダス文明の遺跡を訪ねて

高宮いづみ（近畿大学）

### ■はじめに

2009年3月末（3月22日～29日）に、インダス・プロジェクトの一環として、インド北部のインダス文明の遺跡を訪問する機会を頂いた。筆者は古代エジプト、特に初期国家形成期と王朝時代初期の社会組織を専門とする研究者で、都市や専門化の発達等の初期国家に関連するシンポジウムなどでは、しばしばインドを含む他地域の文明をご専門とする研究者の方々に混じって古代エジプトについて述べる機会があったものの、自ら地域の壁を乗り越えて文明間の比較を行えるほど、他の古代文明について直接的な知見はなかった。

今回インダス文明の遺跡を発掘調査中に訪れるという貴重なチャンスを頂いて、インダス文明に肌で接することができ、このニュースレターで無謀にも体当たりの・

体感的文明比較を試みることにした。というのも、学術的な文明比較の書籍は既に多数出版されているし、インダス文明がご専門の方々にとっては、今さらインダス文明のことを説明するのも僭越であると思われるからである。そこで下記の論考において、体感に関連する時間的・空間的サイズあるいはスケールに、少しだけこだわってみることにした。

実際にインドを訪ねてみたところ、毎年調査のためにエジプトに出かけ、古代エジプト文明に焦点を絞って研究していると、いつしかそれが当たり前のように感じるようになってしまっていたことに気が付かされた。つまり古代文明研究に対する客観的な感度がだいぶ鈍っていたわけで、今回のインド訪問で別の古代文明と現代社会を見聞したことによって得たものはたいへん大きかった。

今回見学したのは、デリーの国立博物館、ハリヤーナー州のファルマーナー遺跡、ラージャスターン州のカーリーバンガン遺跡（訪問順）であった。ここで、インド訪問の機会をくださった長田俊樹さん、任務を帯びた渡航への筆者の同行を嫌がらず、いろいろご教示くださった宇野隆夫さん、発掘調査中の遺跡をご案内くださったデカン大学のシンデ先生をはじめとして、現地や日本でお世話くださいましたインダス・プロジェクト関係者の皆様に、記して感謝いたします。

### ■時間軸

本稿では筆者の専門性から、どうしてもインダス文明について古代エジプトとの比較の観点から見ることになる。そこで、まずは古代エジプトの歴史の概要を述べておきたい。

エジプトでは前3000年頃に最初の統一王朝（第1王朝）が出現し、それ以降おおむね王が君臨する国家が約3千年にわたって継続した。統一王朝出現以前の「先王朝時代」（前4千年紀）に、社会階層の分化や専門化を含む社会の複雑化が急速に進行し、その後半に出現した有力な王国の中から、統一王朝の王が現れたのである。国家が成立した初期の段階は、「初期王朝時代」（前3000～2682年頃）と呼称され、官僚組織をはじめとする国家体制の萌芽期であった。それに続く「古王国時代」（前2682～2191年頃）に、王墓として巨大な石造ピラミッドが建造されるようになり、官僚組織も発達して、強力な中央集権国家体制が確立するとともに、古代エジプト文明は最初の頂点を迎えた。しかしその後の「第1中間期」（前2191～2025年頃）には、中央集権体制が崩壊し、エジプト各地を地方領主たちが分断支



写真1 ハリヤーナー州の麦畑



写真2 ナイル河の風景（テーベ西岸）

配する時代が訪れた。その後エジプトでは、何度か栄枯盛衰を繰り返しながら、前30年にローマ帝国の属州となるまで、古代国家が継続したのである。

インダス文明は、前3千年紀中葉に成立し、前3千年紀後葉まで継続したので、絶対年代としては古代エジプトの「古王国時代」とほぼ同時期である。他方、文明の形成・発展の尺度からすると、その間に、古代エジプトにおける先王朝時代末期（この頃、エジプトは文化的に統一され、都市や文字が出現した）、初期王朝時代、古王国時代のプロセスが含まれるかもしれない。初期王朝時代と古王国時代を合わせると約800年間であり、インダス文明の期間と大きく違わないが、先王朝時代末期まで合わせると1000年間余りで、エジプトの方が類似のプロセスに長い時間がかかったことになる。

本稿では、インダス文明と古代エジプトの主に「古王国時代」を比較してみたい。上述のように、エジプトの古王国時代には王墓として巨大なピラミッドが建造されており、石材を用いた建造技術が高度に発達していた。また当時の王は、唯一神々と人間の間をつなぐ神聖な存在として特別視され、その下に堅固で複雑な社会階層と官僚組織が形成されていた。

改めてインダス文明と比較してみると、古代エジプトの特徴の一つは、前3200年頃に文字が使われ始め、第1王朝以降は君臨した王の名前がおおむね知られていて、歴史が王の業績と政治史を中心軸として語られることである。実際に各王の葬祭記念建造物が考古学的遺構として検出されているため、考古学的資料もおおよそ王統譜に沿って論じることができる。他方インダス文明では、文字の使用は認められているものの、古代エジプトのような文字資料に基づく編年や歴史・文化の解釈は進んでおらず、考古学的資料が文明と歴史理解のための主要資料となっている。エジプト学の中でも考古学を専門とする筆者にとって、もしも古代エジプトに文字がな

く、考古学的資料からのみ歴史を考えたらどうなるのだろうか、と空想してみることもまたたいへん有益であった。

#### ■環境と生業

テリーを車で離れてハリヤーナー州の田園地帯に入ったとき、まずは遙か彼方まで広がる広大な耕作地と豊富な水に驚かされた。いったい、インダス文明が栄えた土地はどのくらい豊かなのだろうか（写真1）。

古代エジプトの主要生業は、ナイル河の沖積低地（氾濫原）で行われる麦栽培であった（写真2）。エジプトにおいて、ナイル河のデルタでは東西約200km、南北約150kmの広い地域で耕作が可能であるが、デルタより南方の河谷部では、可耕地はナイルに沿って長さ約800km、幅は最大でも約20kmの範囲に限られ、その外側は乾いた砂漠である。また麦栽培では、水源地帯の雨季に対応する夏場の増水の後（晩秋から初冬）に沖積低地に播種を行うため、古代には基本的に冬麦の一毛作であった。すなわちエジプトナイル河流域では、最大でも可耕地面積が31,000km<sup>2</sup>程度で、収穫は年1回であった。それに対してインダス文明では、ハリヤーナー州近辺だけでも耕作地面積がエジプトの2倍を遙かに凌ぐであろう。さらに現在のように、インダス文明期にも多毛作が可能であったのだろうか。もちろん単位面積あたりの麦の収穫量が大きく影響したことは確かであるが、ここに、インダス文明の途方もない潜在的なパワーを見た気がした。

上記のようなエジプトの耕作地状況は、年間を通じてほとんど降雨のないエジプトにおいて、農業用水をナイル河に依存していたために生じていた。毎年必ずナイル河の増水は起って氾濫原を潤したものの、年毎の増水位には変動があった。麦の収穫量はその年の増水位（すなわち流量）に大きく左右され、増水位が低い年には収



写真3 ファルマーナー遺跡の都市



写真4 カーリーバンガン遺跡

穫量が減じた。さらに、ナイル河の増水位には長期的な変動があって、初期王朝時代には比較的増水位が高かったが、古王国時代の間次第に増水位が低下し、古王国時代末から第1中間期にかけて低い増水位がしばしば飢饉を引き起こしたことが、古王国時代の中央集権体制が崩壊して、第1中間期に地方分断支配の時期が訪れた主要因の一つであると考えられている。すなわちエジプトでは、長期的なナイル河の増水位変動が文明の盛衰を左右してきたと推測されている。その後、中王国時代（前2191年～）以降にも、エジプトは何度か繁栄と衰退を繰り返すが、これにはやはり増水位の長期的変動が影響したことが多かったという説が有力である。

インダス文明の終焉には環境変化が大きな影響を与えていた可能性が推測されているが、古代エジプトでは、ナイル河増水時の流量の自然復活もしくは流量の変動への人間側の対応によって、何度か崩れかけた国家システムを建て直してきた。ナイル河の環境は、比較的長期的に安定していたと言えるかもしれない。また、現在の研究者が一応古代エジプト文明の終わりとして設定している前30年は、王が支配するエジプト独立王朝の終わりという政治システムの終焉であって、生業システムや生活文化の急激な変化を伴ったわけではなかった。考古学的資料や物質文化のみから見ると、おそらく文明はそれから継続しているように見えるであろう。

#### ■集落

ハリヤーナー州ロークタク県に位置するファルマーナー遺跡では、発掘調査中の集落址と墓地区を見学させて頂くことができた。ファルマーナー遺跡の集落は、インダス文明後期の比較的小規模な集落であるという。のどかな田園の一角で検出された集落址は、現代の周辺村落と比べても、整然とした直線と矩形を基本とする都市的なプランが印象的であった。建材は日乾レンガと焼成レン

ガを使い分けており、日乾レンガを主体とする矩形の建造物の雰囲気は、エジプトとも共通していてなじみ深い感じがした（写真3）。

さて、日乾レンガを主要建材とする集落を念頭に置いて改めて古代エジプトを振り返ってみると、日乾レンガの使用開始は先王朝時代の前3500年頃に遡る。日乾レンガ使用以前の住居は木材・植物の葉や泥で造られ、矩形の他に、円形もしくは隅丸方形のプランがしばしば認められた。すなわち、日乾レンガの使用が、矩形プランの住居と集落の出現に密接に関わっていたらしい。日乾レンガを建材とした矩形建造物群から成る集落は、いくつかの遺跡で前3200年頃には出現した。そして初期王朝時代と古王国時代には、周壁で囲まれた集落が形成されていたが、古王国時代の周壁の形態は楕円形（もしくは不整形）と矩形に大別される。従来の知見によれば、楕円形の周壁を持つ集落は自然発生的であるのに対して、矩形の周壁を持つ集落は王や国家の影響を受けて計画的に設立された可能性が高いという。

矩形の周壁で囲まれた国家が主導して建造したと考えられる集落（都市と呼んでも良い）の例が、エジプト各地で検出されている。古王国時代の例は多くはないが、ピラミッドに伴い神官や葬祭管理者たちが居住したと考えられる「葬祭集落」がいくつか知られている。また中王国時代（前2025-1794年頃）には、葬祭集落の他に、防衛を目的とした「城塞集落」や貴重鉱物を採掘するための「採石集落」の例があった。これらの集落は、いずれも一般民衆が居住する通常集落ではなく、国家機能の一部を担う特殊な目的を持って建造されたことが特徴である。それに対してインダス文明の都市は、計画性を窺わせる矩形の周壁の中に一般民衆も含めた人々が居住していた点が対照的で、その成立のメカニズムに大きな違いが認められた。このように、文明における都市の機能はインダス文明と古代エジプト文明ではだいぶ異なっ



写真5 ギザの大スフィンクスと大ピラミッド



写真7 エジプト新王国時代ラメセス2世の巨像



写真6 エジプト古王国時代の墓室壁画

ており、古代エジプトにおける緊密に国家と結びついた都市の様相の方が、古代文明の中では特異なのかもしれない。

次に、早朝にロータク県を離れてカーリーバンガン遺跡に向かったが、途中で通行の特別許可を取得するために、警察署で2時間余り足止めされた。ちょうどパキスタンとの関係が緊張していた時期に当たっており、インドも隣国との難しい関係を抱えている現状を思い起こした。

そのおかげでようやくカーリーバンガン遺跡に到着したのは、夕刻であった(写真4)。発掘調査が行われてから長期間経っているため、書籍で見ていた発掘調査直後の写真の印象と具体的な都市のプランを地表面から見極めるのは難しかったが、「ここがあのカーリーバンガンか」と思うと、行き着いただけでも感激である。カーリーバンガンに小山状に残る厚い集落堆積と散乱する無数の遺物は、インダス文明の活気を想起させるに十分であった。

カーリーバンガン遺跡における第Ⅱ期の都市の規模は、城塞部が240×120m、市街地が240×360m、合計約115,200㎡である。エジプトでは沖積低地内に大半の集落が埋もれていて、古王国時代の都市が発掘され

た例はほとんどないため、有効な比較資料がない。強いて言えば、エジプト南縁部の地方都市エレファンティネは規模が30,000㎡余り、ヒエラコンポリスの都市は200×300mの60,000㎡である。当時の首都であったエジプト北部メンフィス近郊では、これよりはるかに大きな王都が築かれていたことは確実であるが、人口の多くはむしろ小規模な村落に分散していた可能性が高いと考えられている。都市への人口集中の度合いにも、インダス文明と古代エジプト文明の違いが認められるようであった。

少数ながらもインダス文明の遺跡を訪れて、改めて古代エジプトは「石の文明」であることを実感させられた。エジプトのナイル河流域は岩盤が石灰岩と砂岩から成っており、石材の調達は容易であった。そのために、住居に石材が用いられたことは稀であったものの、古王国時代から墓の建材には石材が用いられるようになり、神殿の建材としても使われ始めた。そのお陰でピラミッドのような巨石建造物が築かれ(写真5)、建造技術や組織も発達し、さらには壁面の浮き彫り(写真6)や石製工芸品(写真7)も発達したわけである。これも環境と文明の相互作用の例であった。



写真8 ミセス・ファルマーナー



写真9 エジプト古王国時代の石造墓

### ■埋葬

ファルマーナー遺跡において、同遺跡発掘調査の隊長であるシンデ先生が、ご親切にも自ら集落址から少し離れた場所で検出された墓地を案内してくださった。耕作地の一角で検出された墓のいくつかには、ほとんどそのまま残存良好な人骨が横たわっていた。ここで、インダス文明を営んだ人に直接会えたわけで、たいへん貴重な体験であった。

実のところ筆者は、25年ほど前に調査のために東京からエジプトに向かう機上で、デリーから乗り合わせた神秘的なほど美しいインド人の女性を見てから、インド女性の隠れた信奉者になっていた。その女性はすらりとした姿態に半透明のサリーを纏い、3才くらいの子供を抱いていたのを覚えている。墓から検出されたうちの1体は、まさにそれを彷彿とさせるほっそりとした姿態と気品を備えた女性であった(写真8)。思わずシンデ先生にその女性の名前を尋ねたところ、「ミセス・ファルマーナー」とのお答えを頂いた。

シンデ先生によれば、この墓地における埋葬は1次埋葬、2次埋葬、象徴的埋葬の3種類に分けられると言う。その埋葬の違いが社会階層をあまり反映していないらしいことに新鮮さを感じた。というのは、古代エジプトの埋葬には、かなり画一的な葬祭概念と共に、被葬者の社会階層が色濃く反映されるのが常であったからである。

古代エジプトでは、人々は来世があることを信じており、現世における肉体が死滅した後も、来世(別の次元)で自らの存在が復活し、永久に存在し続けると考えていた。たいへん人々は自らが持てる経済力をめいっぱい利用して、来世での復活の条件である立派な墓を築き、肉体を保存して、相応の副葬品を埋納したため、埋葬に社会階層が現れることになった。そして、王は死後に冥界の支配者であるオシリス神と合一すると信じられていた

ので、古王国時代のピラミッドのような巨大王墓の建造も可能になったのであった。

したがって古代エジプトの埋葬(特に官僚層の埋葬)には、墓主の生前の社会階層や身分がくっきりと現れる反面、その他の側面は見極めにくい。ちなみに、古王国時代最大の王墓であるギザに築かれたクフ王のピラミッドの規模は、一辺約250m、高さ約150mである。また、高官たちの墓も、しばしばピラミッドと同じように石材で建造されていて、大型のものは一辺が数十メートルを超えた(写真9)。この頃の最小の墓は、屈葬にした遺体を納める最小限の1×1m程度であったことを考えると、平面積を比べても、王の墓は最小の墓の10万倍以上であった。王や官僚の墓は上部構造を持っており、最小の墓は土壌墓だったので、堆積を比べるともっと差が大きいことになる。さらに、官僚墓は、壁面が精巧な浮き彫りで飾られ、豊富な副葬品が納められていた。

しかしながら、インダス文明における葬制は全く異なる葬送概念に基づいて行われていたらしく、ファルマーナー遺跡で発掘された墓はいずれも2×1m程度の規模であった。墓の規模から言えば、おそらくは古代エジプトの職人階層や一般民衆の墓に近いと思われた。死後の世界に関する概念という精神的要素が、葬制や文明に与える影響の大きさを再認識する機会になった。

### ■遺物

インダス文明の遺物を見る機会は過去にも日本で開催された展示会等で何度かあったが、今回国立博物館に展示された豊富な遺物に接する機会を得た。そこで改めて感じたのは、製作物のサイズの問題である。やはり、インダス文明の遺物は、小さくて細かった。そして、それなりにたいへん愛らしかった。それに比べると、古代エジプト人は大きい物好きと言えるであろう。

例えば彫像を見ると、古代エジプト文明においては、



統一王朝成立以前から等身大より大型の神像が出現しており、古王国時代には小型の人物像に混じって、多数の等身大人物像が製作された。また工芸品においても、先王朝時代末から実用品より大きなサイズの棍棒頭や化粧板が作られており、古王国時代には、家具や装身具などの実用品（すなわち等身大・実物大）の装飾が発達していた。古代エジプトでも常に小さな工芸品は製作されたが、全体としてミニチュア嗜好はインダス文明の特徴であるように思われた。

古代エジプトにおける大きい物好きの嗜好は、権威の表現と密接に関わっていたと思われる。初期王朝時代から浮き彫りににおいて、古代エジプト人は人物の偉大さを表現するために、図像の大きさをを用いていた。例えば壁画の同じ場面で、王を他の人物よりも大きく描くことによって、存在的な偉大さを表現することになっていた。古王国時代のピラミッドやギザの大スフィンクスにその著しい傾向が萌芽的に認められ、やがて新王国時代になると高さが10mを越える巨大な王像が盛んに製作されるようになった。

#### ■おわりに

文明比較の動機は、おそらくなぜ地球上の地理的あるいは時期的に離れた地域に似たような現象が生じたのだろうかという疑問に発しているであろう。実際、文明の特徴としてしばしば指摘される都市の存在、文字の使用、長距離交易の存在などは、インダス文明と古代エジプト文明に共通している。さらに両者の間には、主要作物である麦、牛・羊・山羊の家畜、日乾レンガ建材、印章などが共通しており、こうした共通点の一部がメソポタミア文明との接触に由来する可能性を示唆する。

他方、古代エジプトでは集落、埋葬、製作物の至る所に現れる国家や社会階層の存在感が、インダス文明には希薄であることも実感することができた。物質文化や考古学的資料に希薄な痕跡しか残さない国家や社会階層が存在し得たのであろうか、あるいは国家や社会階層なくして多数の文明の特徴を備えた文明が誕生し得たのであろうか。

古代エジプト文明は、文字に加えて豊富な図像資料があるために、そして王や国家が存在したために比較的分かりやすい文明なのかもしれない。今回の訪問の結果、それとは異なるシステムを持つらしいインダス文明にいつそう興味を引かれることになった。

### 南インドにおけるエンマー小麦の栽培分布に関するノート

千葉 一（東北学院大学）

2008年9月10日から10月10日までの1ヶ月と、今年1月24日から3月10日までの1ヶ月半（内2～3月にかけての半月間、グジャラート州のカーンメール遺跡発掘調査キャンプに合流）の2回渡印し、伝統的な栽培植物の分布や利用法などを調査しました。特に、①タミルナード州西部山岳地帯に島の様にとり残されている観のあるエンマー小麦（以後EW）の栽培が、どのような地理的広がりを示すのかと言う点。②デカンの栽培植物がその伝統や特に信仰とどのような関係にあるのかと言う点。この2つを目的としました。しかし今回は、野帳のごく一部を簡単に提示して①にいて管見などを述べ、②については次回に譲りたいと思います。

まず08年の調査で得たEWに関する情報を、以下にごく簡単に示します。インフォーマント名は割愛しく日時：場所：現状や聴き取り・実見内容：その他の情報>の順で箇条書きにしてみます。

- 2008年カルナータカ州とタミルナード州での調査
- 9/13：マイソール県 H.D.Kote：jave goodi (EW) の uppiTTu（粗挽き固粥）実食：材料のEWの nuccu（ザラメ状に砕いた穀）はマイソール市で購入
- 9/15：チットゥラドゥルガ県 Rampura：10年程前迄生産：近村 Venkatapura での生産と、主要産地ビーダル、グルバルガ、ビジャプールの北部3県を示唆
- 9/15：バツラーリ県 Gudekote：20年程前迄生産：「hooLige（薄でのお焼き）や paayasa（甘い粥）等の儀礼食を作った」、近村 Mahadevapura では現在も栽培
- 9/20：バツラーリ県 Kamalapur：「jave goodi (EW) から uMDi（粗糖で固めた玉菓子）や hooLige 等の儀礼食、capaati も作った」：現在は普通小麦を使用
- 9/22：ダワンゲレ県 Hosakere：buDDe goodi (EW) を最近まで栽培：近村 Gauripura、Kankanalu での生産を示唆
- 9/22：ダワンゲレ県 Jagaluru：「祭や結婚式の儀礼食 maadali を jave goodi (EW) から作った」：近村 Jamapura での生産と、主要産地ビーダル、グルバルガ、ビジャプール、ダールワードの北部4県を示唆
- 9/22：チットゥラドゥルガ県 Chitradurga：15年前



写真1 タバコの葉を運ぶの農民、マイソール県フンスール近郊

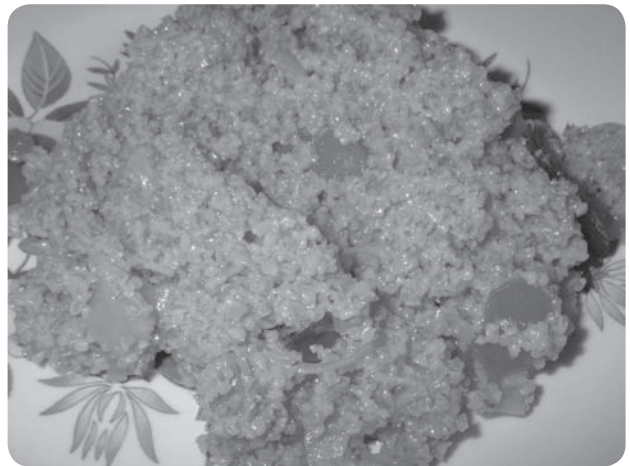


写真3 EW の uppiTTu (粗挽き固粥)、マイソール県 H.D. コーテ

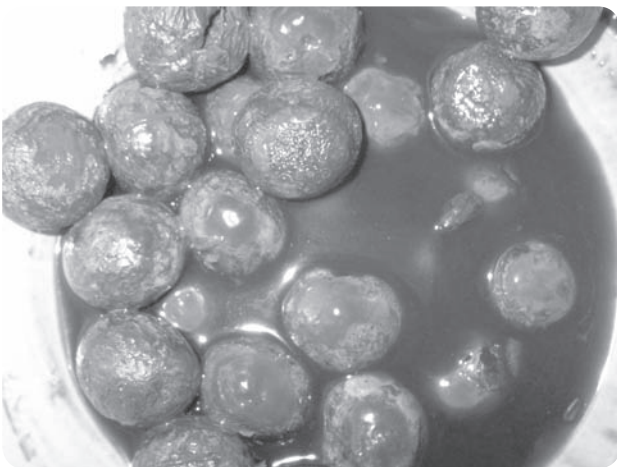


写真2 beTTada nallikaayi (山スグリ) の蜂蜜漬け、マイソール県 H.D. コーテ



写真4 神棚に稲の「穂掛け」、コダグ県クシャルナガル

まで Pandralli 村で EW を生産：「播種時期に雨が必要、後は放って置く」天水による栽培

9/29：マイソール市 Devaraja 市場：EW は消え bansi (マカロニ小麦) が目立つ：2001 年に大田正次先生が訪れ EW を確認

9/29：マイソール市 Devaraja 市場向い食料品店 Mohan Bhandar：EW (穀粒と nuccu) の 1kg 袋詰めを実見：「EW はマディヤ・ブラデシュ州やグジャラート州産」と

9/30：バンガロール市シティ・マーケット Nataraja Store：EW の nuccu (ザラメ状に砕いた穀) の 1kg 袋詰めを実見：マカロニ小麦とそれを原料とす shaavige (極細スパゲティ) が目立つ。穀物商街では 2 店のみが EW を販売、「グジャラート州産」と

10/1：タミルナード州セーラム県 Senkaud (シュヴェロイ山塊西部)：現金収入に繋がらない samba goodi (EW) の作付を 10 年程前から減らしコーヒー農園での労働へ：「poMgalu は EW の収穫祭だ」と

10/3：セーラム県 Vellimalai (カルライン丘陵)：村の

金曜市で EW は確認できず：「奥の Yeluthuru 村にエンマーがある」との情報

10/5：カルナータカ州トゥンクール県 I.D.Halli：2 軒の家が持ち寄った buDDa goodhamulu (EW) の小穂を実見：5 年程前までは多くの家が EW を作り、「小麦料理のすべてに EW を使っていた」と

2007 年 9 月 30 日に、ニルギリ山中のチンナクンヌール村で EW の小穂を見せてくれた baDaga 族の人々は、イスラム勢力からの迫害を逃れ、北のマイソール地方から移住して来た人々の末裔とされています (ニュースレター第 2 号：2007 年 11 月 30 日発行)。彼らは shiva 派の信仰も持ち、そして中には liMgaayata (カルナータカ州のドミナント・カーストの一つ) が数家族いることにも驚かされました。そうしたカルナータカとのただならぬ関係から、ニルギリの baDaga に繋がる EW の線、或いは点をマイソール県に確認できないものかと思いました。

熱帯モンスーン気候の影響が弱まる西ガーツ東麓は、

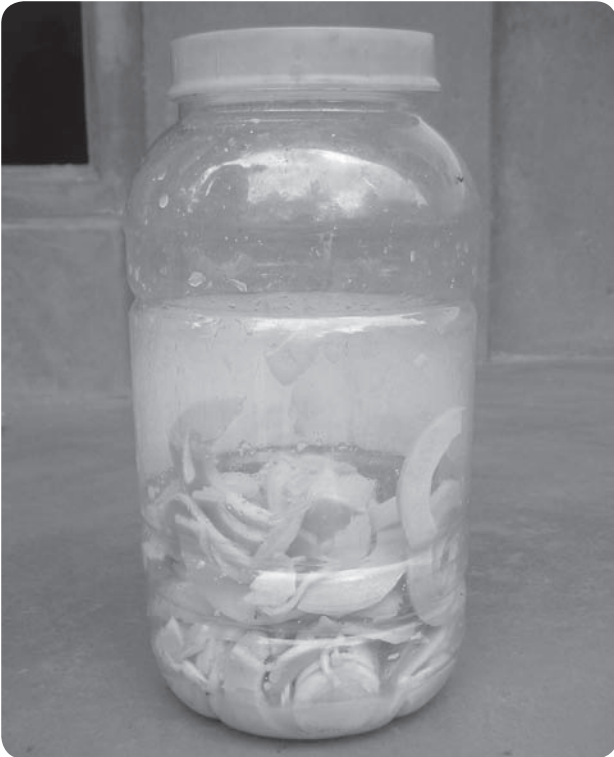


写真5 タケノコの塩漬け、写真はウツタル・カンナダ県ダルマスタラ近郊でのもの



写真8 米俵、ダクシナ・カンナダ県ダルマスタラ近郊 (08年)

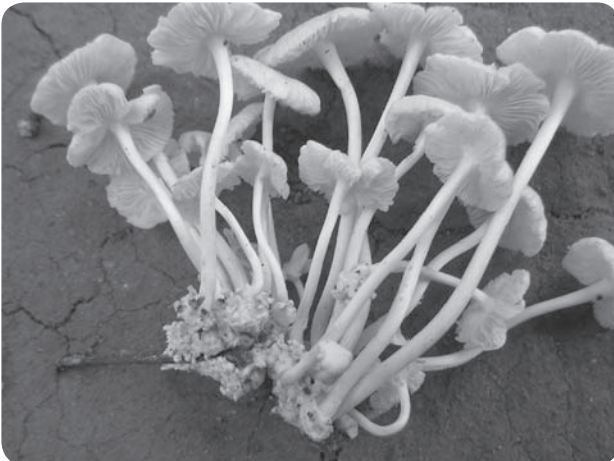


写真6 maMjeNabe と呼ばれる白いキノコ、コダグ県アーネチャウクール



写真7 キノコ、マイソール県 H.D. コーテの定期市 (06年)



写真9 米俵、ウツタル・カンナダ県 goMDa 族の村バトゥカル (01年)

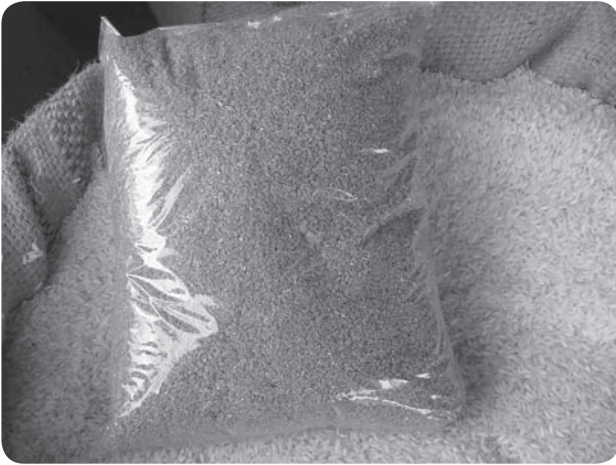


写真10 「グジャラート産」とされるEWのヌッチュ（ザラメ）

サバナ的でかつ高地性の気候も相まう地域です。南インドにしては小麦栽培に比較的適しているように思われ、EWを尋ねマイソール市から40km余り西のフンスールへと向かいました。しかしEWに関する返答は否定的なものばかりでした。めげる事なく、そのままニルギリ山塊に迫るように30kmほど南下し、H.D. コーテへ。その途上、しきりに目にしたものは、近年生産量が急増していると言われるタバコとトウモロコシの畑でした（写真1）。商品作物と伝統作物とのスイッチ関係をおいつつH.D. コーテに着き、この日お世話になるナンジュンダイヤさん宅で朝食をとる事にしました。いつものように台所を覗かせて頂くと、girijana（山の民）の代表的な伝統食「beTTada nallikaayi（山スグリ）の蜂蜜漬け」を発見（写真2）。それにしゃぶりつく私の横で、奥さんは朝食の uppiTTu（粗挽きの固粥）を準備していましたが、なんと鍋の中で掻き混ぜていたのはEWのザラメでした。

その uppiTTu は、パン小麦の rava（粗挽き粉）を使ったモチモチタイプのものとは、味も食感も異なり別の料理のようにさえ思われました（写真3）。使っていた材料は、rava よりも粗い nuccu と呼ばれるザラメ状に砕かれたEWでした。タバコとトウモロコシで食傷ぎみだった気分は一気に晴れ、 uppiTTu を食べ過ぎてしまいました。しかしここには、EWを食べる人達はいても、それを栽培する人達はいないとの事でした。この uppiTTu が、ニルギリの baDaga のEWに連なる線上の一つの痕跡か否かは判然としません。

フンスールから西北西へ50kmほどのコダグ県クシャルナガルは、西ガーツの male naaDu（森の国）への登り口にあたります。モンスーンの風下山麓のため小麦栽培の可能性を期待しましたが、商店街を歩いてみると、どこの店の看板も総て多様な女神の名を冠したも



写真11 EWの小穂、トゥンクール県I.D. ハッリ

のばかりで、帳場の壁の神棚の女神様には、決まって稲の「穂掛け」がされていました（写真4）。開発によって森を追われた girijana（山の民）を支援しているデイヴィッド・ロイさん宅で食事のお世話をいただきました。その台所には「筍の塩漬け」の瓶がありました（写真5）。マレナードでは、しばしば見かける保存食です。また本来、蜂蜜採集や象使いの伝統を持つ jeenu kuruba の居留地アーネチャウクールを訪れた際には、小さな白いキノコ maMjeNabe に出会えました。インドで野生の食用キノコを実見したのは、H.D. コーテの定期市（2006年）と今回で二度目です（写真6,7）。この他マレナードでは、稲俵も比較的容易に確認できたりもします（写真8,9）。このように西ガーツ東山麓は、西山麓と比べ降水量が劇的に減少するものの、小麦と言うよりはやはり稲作や照葉樹林文化にも似た要素が存在する地域です。結局このクシャルナガルの地でEWを確認する事は出来ませんでした。

クシャルナガルの郊外に出ると、タバコとトウモロコシの突出が目につきました。聞けば、「それらの作付増によって navaNe（アワ）と jooLa（モロコシ）が消えた」と。そう教えてくれたラニゲトゥ村のハイパイヤさんの家の後ろには、 raagi（シコクビエ）がヒツソリと栽培されていました。ガイドをしてくれたデイヴィッド・ロイさんは、「以前は saamai（雑穀の一種）もあった。しかし州政府は高収量品種や売れる物を奨励するため、雑穀が栽培されなくなってきている。しかしハイブリットなどの栽培には金がかかる事もあるし、借金をせざるを得ない者もいる」と。パン小麦やマカロニ小麦に比べ、難脱穀性や硬質のため収穫から口に入るまでに手間がかかるEWは、商品作物としては不向きな性質を持っています。雑穀を中心としたサバナ農耕の冬作としてのEWが、サーマイに先行してこの地域から駆逐されたと、

推察する事もできるかも知れません。

baDaga との関係が深いマイソール県を含む南部カルナータカは、米、シコクビエ、サトウキビなどの生産が盛んで、乾燥するデカンでも比較的湿潤な地域です。また先にも述べたように西ガーツ東山麓は、西山麓と比較してモンスーンが勢いを弱める一帯です。しかしそうした EW（年間降水量 600～800mm）に対して比較的好適な降水の地域よりも、乾燥するデカン高原中央部により近い中部カルナータカ東半（チットウラドゥルガ、バツラーリ、ダワンゲレの3県）から、EW に関する具体的に信頼度の高い情報が出て来た事は驚きでした。この地域の EW 生産者は、それを商品としてではなく自家消費作物として、或いは儀礼食に必須なものとして栽培している様でした。また彼らは口々に、主要生産地としてビーダル、グルバルガ、ビジャプールなど北部カルナータカ諸県を示唆しました。

この北部カルナータカ諸県が EW ベルトを構成し、インドにおける EW 流通の一大拠点を形成していると、内心確信しました。その裏を取ろうとした、マイソールとバンガロールのマーケットで得た情報は、かなり意外なものでした。マイソールの食料品店 Mohan Bhandar の主人は、「EW はマディヤ・プラデシュやグジャラート州からやって来る」と答え、またバンガロールの穀物商は2店とも「グジャラート産」と答えました（写真 10）。想定していた北部カルナータカ EW ベルトを遥かに越え、主要栽培地域の問題は、一気に北インドと西インドに拡散してしまいました。

思い起こせば 2007 年 9 月 29 日、ニルギリ山塊の標高 2,300m 高地避暑都市ウーティーの市場で初めて EW に出会った時、店の売り子は「パンジャープ産」と答えていました（ニュースレター第2号：2007年11月30日発行）。「緑の革命で在来品種がいち早く駆逐されたと聞くパンジャープ？そんなバカな！」と思い、間髪入れず否定した自分を恥ずかしく思います。もしこれら3件の情報が事実だとしたら、インドは「世界のエンマー小麦大国」ということになるのではないのでしょうか。二粒系小麦の中でも最も原始的とされる EW が、何故インドに太古から現在に至るまで、それも広範な地域に保持され続けているのだろうか？という疑問を禁じえません。そんな宿題を抱えつつ、調査はタミルナードのシュヴェロイ山塊へと向かいました。

高温のタミルナードにおける EW の栽培は、高冷地栽培にある程度限定できるかも知れません。西ガーツのニルギリ山塊同様、東ガーツのシュヴェロイ山塊西部の高地避暑地イェルカウドウの近村センカウドウで

samba goodi(EW) の栽培が確認できました。EW の小穂を保持している農民達は皆、コーヒー農園に働きに出ていて不在だったため実見は適いませんでした。村ではサーマイ、シコクビエ、tenai（アワ）が少し栽培されていると聞きます。それらも EW と同様、コーヒーを筆頭としたガヴァ、胡椒、カマラオレンジ（温州ミカンに似ている）、プランテイン（調理用バナナ）などの商品作物へと比重が移って来ている様でした。しかし伝統的な諸需要が、農民たちに細々とですが EW の栽培を続けさせているようも感じました。

日本で言えば、小正月の小豆粥に相当するタミルの poMgalu。これまで、そのメイン素材を米と認識して来ました。幾度か口にすることがある儀礼食としての甘い poMgalu 粥の総てに、その例外はありませんでした。しかし一人の村人が「poMgalu は samba goodi(EW) の収穫祭だ」といった言葉に、米に偏重してきた自分のバイアスを指摘された思いでした。同時に、彼らが親から子へと大切に伝えて来た「EW に込めた魂の再生の願い」とも言うべきものも感じたように思います。

インダス文明の遺跡が点在するパンジャープやグジャラート州に、4500年の時を超えて EW が栽培されている？。それも確かに感動的です。また一方で、遠くはなれた半島突端やその山岳部に EW がひっそりと息づいてもいる。そうした辺境感漂う半島突端や山岳部における古層の堆積には、EW に適した気候的なシェルターとしての意味と、民族間の関係や移動と言った一種政治的なシェルターの意味もあるのかも知れません。その視点に立てば、半島南部におけるドゥラヴィダ語族の堆積と EW の点的重複は、「マディヤ・プラデシュ産 EW」を理解する助けにもなり得ます。

インドを南北に分けるヴィンディヤ山脈は、少数民族の宝庫とされる雲南にも連なる地域で、指定部族も比較的高い比率で存在しています。マディヤ・プラデシュ州は、その中にすっぽりと納まります。アーリヤ進入以前の諸民族が、原始的な EW と共にヴィンディヤ山脈のマディヤ・プラデシュに堆積していると、理解する事もできます。そして現在そこには、EW を商品作物として栽培している人々がいる？。2007年にニルギリのヴァイス・カンパニーで EW の rava（粗挽き全粒粉：加工地はニルギリ南麓の工業都市コインバトル）の袋詰めを手に入れました。その時、タミルの何処かに商品出荷する程の生産地が潜んでいるかもしれない（ニュースレター第2号：2007年11月30日発行）と思いました。そんな一縷の望みを胸にシュヴェロイの森を巡り、ヴィンディヤの森とのパラレルな推移性も巡らしもしま



図1 07-09年の調査で把握したEWの栽培分布

した。しかし商品作物としてのEWどころか、シュヴェロイ山塊東部でEWに出会う事は出来ませんでした。私達に残された時間は、あと2日となりました。

EWが確実に存在していると思われるチットゥラドゥルガ県ヴェンカタプーラ村までは、約600km。しかし帰国フライトを考慮すれば、残された展開はバンガロール近隣県に絞られました。そして浮上したのが、バンガロールの北西に位置するトゥンクール県でした。EW情報が集中するチットゥラドゥルガやバツラーリ県と、かなり類似した地域に思われたからです。早速「ダメモト」で押しかけた友人の村で、私達は今回始めてEWの小穂に出会うことが出来ました(写真11)。アンドゥラ・プラデシュ州に近く、テルグ語が話されているその村の名は、iTaka dibbana haLLi(「レンガの丘の村」、通称I.D.ハッリ)。20年ぶりの訪問でした。

この日EWの小穂を見せてくれた2人は、アンドゥラ地方に典型的に見られる支配的カーストreDDiでした。I.D.ハッリはカルナータカにあって、reDDiカーストが支配的な村です。この事は栽培分布に関して、アンドゥラ・プラデシュ州がその対象に入り得ることを示唆しているかも知れません。J.PercivalのThe Wheat Plant(1921)では、旧ハイデラバード州はEW栽培地



写真12 EWの青い穂とサンプル、トゥンクール県I.D.ハッリ



写真13 EWのpaayasa(ミルク粥)、バンガロールで友人の奥さんが再現

域には入っていないようです。しかし2007年の調査で、タミルナードのダルマプリ市(バンガロールの南東約100km)のスーパーで見つけたEWのravaの袋詰めに対し、店員は「アンドゥラ産だ」と返答しました。reDDiが保持するEWは、その時の言葉を裏付けているようにも思われます。アンドゥラ・プラデシュ州のプレゼンスは、これまで考えられて来た以上に高いのではないのでしょうか。

友人のK.スリニワサ・レッティによれば、「以前は多くの家でbuDDa goodhamulu(EW)を作っていたし、パン小麦を使う料理のすべてに、以前はEWを使っていた」と。ガネーシャ・チャトルティの儀礼食karikaDabu(餃子型の揚げ菓子)、祭などの際に作られるsajjige(玉菓子)・hooLige(薄でのお焼き)・paayasa(甘いミルク粥)、勿論、日常食のuppiTtuやpuuriにcapaati、スナック的なkajjaaya(ドーナツ)、タコ焼き型のguMtapamganalu(タミル語でパニヤラム、カンナダ語でappaM:カルナータカでは米とケツルアズキの発酵シトギで作られるのが普通)、shaavige



写真 14 女性達による EW の収穫風景、チットゥラドゥルガ県  
ウェンカタプール

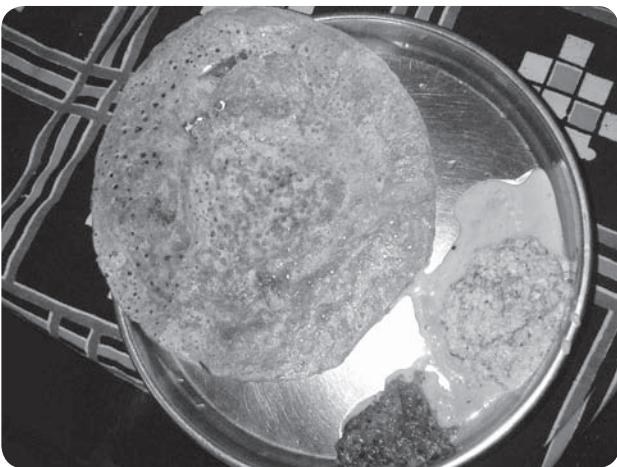


写真 15 EW の doose (未発酵クレープ)、バツラーリ県コッ  
トゥールで友人の奥さんが再現



写真 16 畑の真ん中にある先祖の墓の前で、5人の既婚女性(す  
べてリンガーヤータ・カースト)を歓待する模様、ビジャ  
プール県ドーヌール

(極細スパゲティ)…。そこには、製粉技術が発達した後も人々がパン小麦へとは転換せず、素材としてのEWを大切に保持しながら創り上げて来た食文化が存在していたと思います。

タミル山岳部と同様、弱々しいEWの生産活動を南部カルナータカのI.D.ハッリで確認する事になりました。それは確かに矮小な点でしたが、2009年の調査ではかなり広範にEWの生産が点在していることを確認できました。以下に、その実見例などを簡単に示します(図1の栽培分布図)。

■ 2009年カルナータカ州(一部アンドゥラを含む)でのEWに関連する実見例

1/26: トゥンクール県 I.D.Halli: buDDa goodhamulu (EW) の小さな畑2箇所を実見(写真12): 既に青い穂を出しており、半月後に収穫予定

1/27: トゥンクール県 Cikkayalkur (I.D.Halliの南5km): エンマー畑を実見: 5年ほど前まで、総ての家がEWを栽培、現在は1軒だけ

1/27: トゥンクール県 I.D.Halli: EWのcapaatiと儀礼食sajjigeの調理工程を実見・実食

1/28: トゥンクール県 CikkadaLLavaTa (I.D.Halliの西へ10km): 青い穂を出したEW畑(芥子と昆作)を実見: 女神cauDeeshvariに捧げ始食するneyikaara(職布工)

1/30: バンガロール市: EWのuppiTTuと儀礼食paayasa(写真13)の調理工程を実見・実食: Rajajinagar地区の穀物商から購入した「SAMBA WHEAT BROKENS」(nuccu=ザラメ)の袋詰(加工地コインパトール)を使用

1/31: アンドゥラ・プラデシュ州アナタプール県 Hindupur (I.D.Halliのほぼ東20km)の穀物商Shree Geetha Store: EWの穀粒とrava(粗挽き粉)を実見・購入: 穀粒Rs.40/kg、rava Rs.60/kg、EWはパン小麦の2倍近くの値段、穀物商数軒で「jave goodi」でマカロニ小麦を指示する傾向

2/1: アンドゥラ・プラデシュ州アナタプール県 Kalyanadurga近郊: 「jave goodiと雑穀korule作っている」と言う農民に遭遇: jave goodiがEWを指示するか否か未確認

2/2: チットゥラドゥルガ県 Rampura: EWの小穂を実見: 東に5kmのVenkatapura(アンドゥラ・プラデシュ州境に近接)産

2/3: バツラーリ県 Kondapur: 約5m×60m=300㎡のEW畑を実験: トゥンクール県で実見した畑より規模大、わずかにエンバクの混入→伝統的に継承されてきたEWを傍証

2/4: チットゥラドゥルガ県 Venkatapura: 女性に限定されたEWの収穫作業を実見(写真14): 収穫直



写真 17 「ジャヴェ・ゴート」の注文で出された大麦とそれに混入していたEW、バツラーリ県バツラーリ市



写真 18 テカン高原に分布するヴァーティソルという黒土、ビジャプールのドーナール



写真 19 EW の capaati と儀礼食 sajjige (ギーと粗糖を使った玉菓子)、トゥンクール県 I.D. ハッリ

前の防災儀礼 caraga、脱穀場でEW小穂の raashi(小山)に若水、mora(箕)を使った供饌…EWの収穫には諸儀礼が付随、実見は適わなかった。

- 2/5 : バツラーリ県 Mahadevapura : buDDe goodi(EW) 畑とマカロニ小麦畑を実見 : 収穫の早朝 caraga を撒く防災儀礼、自家消費のために栽培、村には4軒の栽培者
- 2/5 : バツラーリ県 Halasagara : buDDe goodi(EW) の畑を実見、横にはマカロニ小麦畑 : EW と jaagari から作る gaarige (?) という揚げ物、収穫早朝の防災儀礼 caraga
- 2/6 : バツラーリ県 Kotturu : EW の doose (未発酵のクレープ) と shaavige などの調理工程を実見、doose 実食 (写真 15) : アンドウラの Hindupur で購入したEWを使用、EWの hiTTu (全粒粉) → doose (ペーストは時間をおけば発酵)、EWの madaa (精白粉) + 胚芽 → shaavige
- 2/6 : バツラーリ県 Kotturu : EW 収穫時5人の既婚女性を歓待 (ビジャプールの)、2/13にビジャプールの Donuru 村でモロコシ脱穀の際に同儀礼を実見 : 防災儀礼の caraga、麦刈りの人々 (男女) は5人の既婚女性の足に触れ namaskaara (敬礼) して刈入れ開始 (最初にその家の主婦が象徴的に麦を刈り、スタート)
- 2/7 : バツラーリ県 Upanayakanahalli : EW 畑を実見、横にはマカロニ小麦畑 : kuruba (シェパード) 多住村、その多くがEWを栽培
- 2/8 : バツラーリ県 Kencatanahalli : 道端のEW畑を実見 : 「Varadapura 村ではEWを量産」との情報
- 2/8 : バツラーリ (ダウングレ?) 県 Pinjarahegudar : 道端のEW畑を実見 : piMjaara (綿紡糸工) 多住村、現在その多くがイスラムに改宗
- 2/11 : ビジャプールの Mallikarjuna Banarotti : EW 畑を実見 : これまで見た中で最大の栽培面積、北上するに従い規模が拡大している印象
- 2/11 : ビジャプールの Basavanna Bagevadi : ビジャプールの市でEWを栽培する親戚から贈与されたというEW穀粒を実見 : 神棚にはマカロニ小麦などの「穂掛け」を実見
- 2/13 : ビジャプールの Donuru : 穀物の刈入れや脱穀に先行してなされる「五人の既婚女性への歓待」の儀礼を実見 (写真 16) : 刈入れと落穂拾いは女性の仕事、マカロニ小麦の落穂を拾う女性達を実見
- 3/7 : バツラーリ県 Ballari 市の穀物商 kaalva accayyana aMgaDi : 「jave goodi」と注文し「食べ





写真 20 穀象虫に塗れた EW の穀粒と小穂、アナンタプール県  
ヒンドゥープール

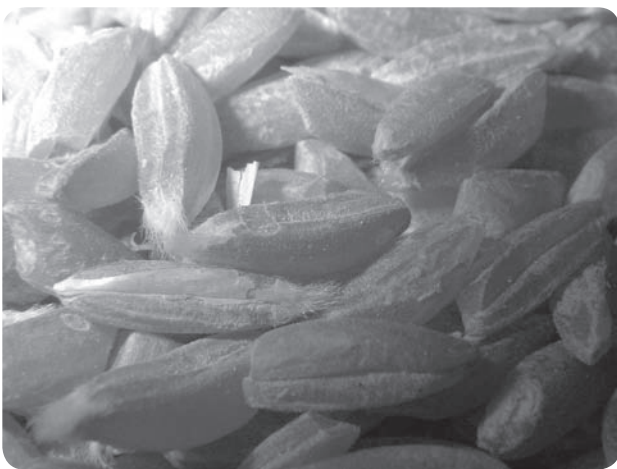


写真 21 ビジャプール産の EW の穀粒、ビジャプール県バサワ  
バゲワティ

る jave はない」と言われて出された大麦（「食べない jave」hooma の儀礼用）を実見

3/8：詳細に大麦を観察わずかに混入している EW の小穂（写真 17）→大麦と EW の混作？、「jave goodi」という言葉で地域によって EW、大麦、マカロニ小麦を指示？

I.D. ハッリから半径 10km 圏内の 3 村で EW 畑を確認できました。その生産はどれも貧弱なものでしたが、他の EW 栽培の情報から総合して、トゥンクール県内にはまだ自家消費のための小生産者が広範に存在していると思われます。また、州境を越えた隣のアナンタプール県でも同様の事が言えるかもしれません。しかし畑の隅に追いやられる様にして栽培されている EW を実見して、トゥンクールの EW 栽培も時間の問題という印象を受けました。

EW の生産量の減少について、友人の K. スリニワサ・レッティは「昔と比べ雨が少ないため、buDDa

goodhamulu (EW) を作れない」と言います。確かに I.D. ハッリ周辺（その後、チットウラドゥルガ、バツラーリ、ダヴァンゲレ諸県でも）で実見した EW 畑は総て、地下水の汲み上げに依存し、天水によるものは皆無でした。こうした降水量の減少というインパクトに加え、I.D. ハッリにおいても 5 年ほど前から唐辛子、トマト、トウモロコシ、ヒマワリ、ヒマなどへの転換が進み、またトゥンクール県は、巨大消費地バンガロールを控えた近郊農業地帯へと変貌しつつあるとも聞きます。それは場所によっては、200m 以上も掘り下げて得られた地下水なしには継続不可能な農業の姿であり、自家消費作物としての EW は、換金作物栽培との水をめぐる競合に曝されていると考えられます。

しかし競合は水だけではないようでした。「goodhamulu (EW) には黒土が向いている」という話を幾度か聞きました。デカンにおける EW の栽培は、天水とこの黒色土の保湿性に依存していたのかも知れません。その黒土の畑もまた換金作物に優先的に回され、EW の栽培は水・畑など生産手段・労働対象を失いつつある状況が窺えます（これまでその黒色土をデカン高原に分布するとされる玄武岩の崩壊土壌、黒色綿花土と理解していましたが、後に京都大学の三浦礼一さんから「乾くと深いひび割れが入るヴァーティソルという土」という教示を受けました（写真 18）。実際、前年に EW の小穂を見せてくれた 2 人の reDDi は今年作付を見送っていました。しかしそんな状況でも、I.D. ハッリではナーガブシャン・レッティさんの一軒だけが頑なに EW を毎年栽培し続け、儀礼食だけでなく capaati などの日常食にも EW を使い続けていました（写真 19）。

バンガロールに一度戻って三浦さんと合流し、中部カルナータカのベツラーリ県へと北上。ショートカットも兼ね、アンドウラ・ブラデシュを抜けて向かうことにしました。その途上のアナンタプール県ヒンドゥープールで、二人で手当たり次第に穀物商をあたりましたが EW は見つからず、あきらめ掛けた最後の一家 Shree Geetha Store で、穀象虫に塗れた EW を見つけました（写真 20）。これが私達がアンドウラで確認する最初の EW になります。

その後、カルナータカのバツラーリ県、ダヴァンゲレ県（数年前にバツラーリから分立）、そしてチットウラドゥルガ県北部で、多くの EW 畑を実験することになりました。このアンドウラのアナンタプール県は、カルナータカのトゥンクール、チットウラドゥルガ、バツラーリ三県とは州境を挟んだ東隣です。恐らく EW の点在分布は、アンドウラ・ブラデシュ西部をも巻き込み

ながら、帯状に広がりつつビジャプール、グルバルガ、ビーダルなど北部カルナータカの諸県にまで至る事は確実と思われます。今回ビジャプールを訪れた際、幸運にもEWを確認することができました。それは今のところ、私たちが確認したインドにおける「北限のEW」ということになるでしょうか（写真21）。しかし北部カルナータカは、薄弱なEW栽培の帯がその北のマハラシュトラー州を貫き更に北のマディヤ・プラデシュ州に至る、旅の途中に過ぎないのかも知れません。

### グジャラート地方のインダス文明について—覚え書

小磯 学（神戸夙川学院大学）

インダス文明の研究は、ハラッパーやモヘンジョ・ダロなどこの文明を象徴する大規模な都市遺跡の発掘調査から始まった。必然的に出土資料の種類や量も多く、これがそのままインダス文明のイメージを形作っていくことになる。その後の今日に至るまでの研究は、アメリカ隊のハラッパーの調査に代表されるようにこうした都市遺跡から得られる情報の質と精度を高めていくとともに、同時にまた小規模な遺跡にも目を向け、相互のネットワークに根ざした総体としての文明のしくみを明らかにすることにあったといえる。この課程で明らかになった事実のひとつが、文明内部の地域性でもあった。

インダス文明の南東部に位置するグジャラート地方は、この文明の核地域と考えられるシンド地方のインダス川中流域、あるいはパンジャブ地方のガッガル・ハークラ川中流域からやや離れた独自の地理的環境にある。ただしインダス文明が栄えていた当時にガッガル・



図1 グジャラート地方の地理的環境

ハークラ川の水が下流まで流れていたとすれば、グジャラート地方はその河口に接していることから核地域とは陸路だけでなく河川によっても密接な結びつきが保持されていたであろう。

このグジャラート地方では、前4千年紀末から前2千年紀半ば頃にかけてハラッパー文化（インダス文明）以前、ハラッパー文化、ハラッパー文化以後と大きく3つに区分できる時期に各地に諸文化が展開し、現在540箇所以上の遺跡が確認されている。ここではインダス文明をめぐるグジャラート地方の実情について簡単に振り返っておきたい。

### ■地理的背景と遺跡の分布

まずグジャラート地方の地理的環境について確認しておく、大枠で以下の4つの地方にまとめることができる。

i) カッチ地方：グジャラート地方北西部に位置する、北と南がそれぞれ半年間海水に覆われる大ラン湿原とアラビア海とによって挟まれた島状の土地である。その北西側に連なるシンド地方と同様に非常に乾燥しており、300～400mmに過ぎない年間降水量はモンスーン期の80～90日に限られる。年間を通じて水の流れる川がなく、石灰岩や砂岩からなる多くは平坦な土地であるが、北部を中心に最高で標高425mの山並みが見られる。また随所に見られる玄武岩の露頭は、インド半島部から連なるデカン・トラップと呼ばれる玄武岩台地の北西端にあたる。これはメノウ系の準貴石を産出する源でもある。

今日では、このような環境にも適応した雑穀のひとつである夏作物のトウジンビエ（バージラー）の栽培とウシやラクダを対象とした牧畜（遊牧）が主要な生業となっている。

ii) 北グジャラート地方：カッチ地方の東方に広がる大・小ラン湿原の東岸に位置し、砂丘や砂質の土壤が広がる土地である。年間降水量は350mm以下で、トウジンビエが主要作物であるがその生産性は低く、やはり牧畜も重要な生業となっている。東方のアラヴァリ山地からはバナース川、ルーベン川などが小ラン湿原に向かって流れ出るが、水があるのは雨季のみである。

iii) サウラーシュトラ半島：アラビア海に面した直径およそ380kmのほぼ円形をなすサウラーシュトラ（カーティアワール）半島。年間降水量は500～750mmで、半島中央部から四方に流れ出る小河川は、その水量の差が乾季と雨季とで大きいものの、年間を通じて水流を有している場合が少なくない。またこれらの河川沿い

を中心にデカン・トラップ特有の黒色綿花土が堆積し、カッチ地方に比べると土地は肥沃である。一部で標高1000mに達するような山地が各地に点在する。主要作物はやはりトウジンビエとモロコシ（ジョワール）である。モロコシは基本的に夏作物であるが、この地方では冬季に栽培することもあるという。綿の栽培も多い。

またサウラーシュトラ半島が本土と接する北東部に広がるナール低地は、19世紀の初頭までは雨季のたびに半年間にわたって水で覆われ、その間は半島全体が巨大な島のように本土から分離されてしまっていたという。ただし現在では沖積土の堆積が進みこうした現象は起きない。このナール低地のさらに南端に連なるのがパール地帯で、やはり雨季には広い土地が水で覆われるが、水がひく10月頃に種をまくことで灌漑せずにコムギを栽培することができる土地となっている。ここに位置するロータルやラングプルなどからはコムギの出土は確認されていないものの、これらの遺跡が築かれた背景にはカッチ地方や北グジャラート地方とを結ぶ交通の要所であるという点だけでなく、何らかの形でこうした自然環境も要因となっていたと思われる。

iv) 南グジャラート地方：グジャラート地方の南東端に位置するマヒー川からナルマダー川とタープティー川の河口にかけて広がる平野部で、西側のカンパート（キャンベイ）湾と東側に南北に連なる一部で標高1000mとなる山地とに挟まれた土地である。この地方にも黒色綿花土の堆積が見られ、年間降雨量は1000mm以上とグジャラート全体でもっとも高い。今日ではモロコシとともにイネが主要な作物になっているほか、ここでも牧畜が重要な生業となっている。

#### ■遺跡の分布と年代

ここでは以下の3つの時期に大きく区分して、遺跡の分布を概観しておきたい。それぞれの年代については、現状ではあくまでも便宜的なものである。

##### 【ハラッパー文化以前～前4千年紀末～前2600年頃】

近年の大きな成果のひとつが、グジャラート各地で発見されたハラッパー文化以前に遡る在地の諸文化の存在である。ただしそれぞれを特徴づける土器が発見されている遺跡は現状ではいずれも数箇所を過ぎず、地理的に非常に限られている。

i) アナルタ土器：カッチ地方東部のドーラーヴィラー1期やまた北グジャラート地方のナーグワダIA期やカーンメールなどのいずれも遺跡の最下層から発見された白色彩文などによって特徴づけられる一群の土器。一部はシンド地方のアムリ土器やコート・ディジー土器と

も比較されている。とくに北グジャラート地方の場合にはアナルタ土器（伝統）とも呼ばれており、伸展葬のほか壺を用いた2次葬など西方のバローチスターン地方との関係を窺わせる文化伝統でも知られている。またその後半の時期には、スールコータダーIA期などで見られるように、土器全体に占める割合はわずかとなるものの一部でハラッパー文化と共存する。

ii) プレ・ブラバース土器：これまでサウラーシュトラ半島南端に位置するブラバース・パートン（ソームナート）の最下層のみから発見されている櫛描文や厚手の鉢などを特徴とする土器。時期的にも限られており、上層で登場しハラッパー文化と共存するブラバース土器とも関連をもたないまま入れ替わるように消滅してしまう。

iii) パードリー土器：サウラーシュトラ半島東端に位置するパードリーの最下層のみから発見されている手捏ねで厚いスリップや白色彩文を特徴とする土器。北グジャラート地方の土器との類似性が指摘されており、詳細な比較検討が課題となっている。

iv) 雲母混入赤色土器：ロータルの最下層でハラッパー土器と共判して発見されたもので、胎土に雲母の薄片を多量に含むことを特徴とする。在地の土器とされているが半球状鉢など（ソーラート・）ハラッパー土器と共通する器形が目立ち、独立した文化といえるかは疑問が残る。

上記の土器文化の発見によって、グジャラート地方の各地が早くから開拓されていたことが明らかとなったことが大きな成果である。前3千年紀半ばにハラッパー文化が登場すると、プレ・ブラバース文化のように消滅してしまうものがある一方で、アナルタ文化のように共存していくものがある。それはハラッパー文化がどのようなプロセスをへてグジャラート地方に進出したかを物語っており、より詳細な比較検討が今後の課題といえる。

##### 【ハラッパー文化：前2600年頃～前1700年頃】

この時期はさらに前2100～1900年頃以前と以後で、ハラッパー文化前期・後期と大きく区分して考える必要がある。ここでいうハラッパー文化前期とはインドス文明の最盛期を含み、グジャラート方面への最初の進出が試みられたカッチ地方にドーラーヴィラーやデサルプル、スールコータダーなどを初めとする20箇所ほどの集落が築かれた時期である。おそらくはわずかに遅れて、サウラーシュトラ半島北縁辺部の円弧状の地域にロータル、ラングプル、クンターシー、ナーゲーシュワールなどが築かれていった。

カッチ地方はシンド地方の影響が強い地方であること

は事実とはいえ、前述したように一部でハラッパー文化以前からつづく土着の文化との共存が認められ、シンド地方でもなくサウラーシュトラ半島でもない、特徴をもった独自の地方として把握する必要がある。

またとくにカッチ地方とサウラーシュトラ半島北縁部のクンターシー、ゴラ・ドロ（バガサラ）、ジャイダク（ピタル）などの集落では、小規模でありながら石灰岩や日干しレンガを積んだ堅牢な周壁が築かれていたことが大きな特徴といえる。外敵への単なる防御だけでなく、権威の象徴といったシンボリックな機能もあったのかもしれない。

とくに検討を要するのは、サウラーシュトラ半島へのハラッパー文化の展開のプロセスについてである。半島の北東部に位置するラングブルの1950年代の発掘に基づき設定されたラングブル編年によって、ハラッパー文化前期（RGP IIA 期、IIB 期）、ハラッパー文化後期（IIB 期ないし IIC 期）から輝赤色土器文化（III 期）に至る変遷が明らかにされた。これがグジャラート地方全体においても基準となる編年として位置づけられてきた。ところがこの編年はその後、それぞれの時期をどこで線引き区分するかに関して異なる解釈が度々出され、混乱を生んできた。これに伴い、とくにサウラーシュトラ半島における時期ごとの遺跡数の変化も、ハラッパー文化前期からハラッパー文化後期にかけて「急増する」とされたり「激減する」とされたり、まったく逆の見解が出されるという奇妙な現象さえ生んでいる。

そうした要因のひとつに、540 箇所以上確認されているグジャラート地方の遺跡のうち実際に発掘されたのがおよそ 10% に過ぎず、その多くも断片的な情報しか伝えられていないという事実がある。その他の 90% の遺跡の帰属時期もわずかな表採資料に基づき判断され、その結果のみが伝えられているのが現状である。このようにこれらの時期区分と時期ごとの分布の変遷についての記述は、根拠がきわめて曖昧といわざるをえない。

この問題に密接に関わるのが、サウラーシュトラ半島中央部に位置するロージュディーの発掘調査で提唱された「ソーラート・ハラッパー」文化である。これはこの遺跡で確認された（シンド地方に代表される）ハラッパー土器に酷似した一群の土器の帰属年代が、放射性炭素測定によればハラッパー文化前期と同時期の前 2600 年前後に遡ると算出されたことに端を発する。これは同時期でありながら、シンド地方とは異なり土器の大半を半球状鉢が占めること、淡黄色土器や胎土がきわめて粗い粗製土器などを伴うこと、彩文の文様構成がシンプルであることといった固有の特徴を有するために、ハラッ

パー文化内の地域的なヴァリエーションとして位置づけ解釈するものであった。これに従って上記のラングブル編年やサウラーシュトラ半島全域の時期区分も、ソーラート・ハラッパー文化の解釈に合わせた修正案が示されてもいる。いずれにしても、こうした特徴の一部は南グジャラート地方などを経て輝赤色土器や東方のデカン高原の金石併用諸文化にも受け継がれていくと思われ、ハラッパー文化と後代の諸文化やさらには歴史時代にまで至る編年を確立していく上でも重要な検討課題となる。

ソーラート・ハラッパーに関しての解釈の要は、前述したようにこれがハラッパー文化前期と同時期とした点にある。ただしこれは放射性炭素測定の結果のみを根拠とするものであり、土器を初めとする出土遺物の編年学的な詳細な比較検討は明確になっていない。サウラーシュトラ半島に展開したハラッパー文化（に関連する土器）の独自性は、この地方の調査が着手された 1930 年代にすでにこれをハラッパー文化の後期とするものと指摘された経緯がある。出土資料のほぼすべてがソーラート・ハラッパーからなる遺跡が現状ではロージュディーのみということもあり解釈が先行したきらいがあるが、いずれが正しいのか、新たな資料を加えた慎重な再検証が急務となっている。

一方で、ラージャスターン地方のアハール文化が起源地とされる黒縁赤色土器のサウラーシュトラ半島やカッチ地方への進出の問題がある。最近ではこの文化も前 3 千年紀初頭ないしそれ以前にまで遡るとされており、一部でハラッパー文化前期段階に共存が見られる。とくに半球形の鉢など黒縁赤色土器とソーラート・ハラッパー土器とで共通するものもあり、東西の広域におよぶ直接的・人的交流を物語る。こうしたグジャラート地方全体のハラッパー文化の成立や維持の検証については、現在進められているカーンメールやシカルプルなどの成果も大きな役割を果たすことになる。

最後に生業についても触れておく。グジャラート地方は、ハラッパー文化が展開した前後に一部がアフリカ起源の夏作物の雑穀であるシコクビエやキビ、アワなどが南アジアにおいて初めて積極的に栽培された地域にほかならない。これとウシを中心とした牧畜とがセットとなり、現在のインド中部にも継続して見られる乳の利用を行う農牧文化圏を形成していった。現状では確証はないものの、ソーラート・ハラッパー文化において卓越する半球状の鉢も、こうした生業とも関連して固有の料理に対応して用いられた銘々器のようなものだった可能性もある。牧畜を重視した点はシンド地方やパンジャブ地

方のハラッパー文化でも共通するが、これらの地方では基本的に冬作物のコムギに基盤を置いていた点に地域的な相違を生んだ要因のひとつがあったと考えられる。

【ハラッパー文化以後：前 1700 ～ 1400 年頃】

基本的にはラングブルで発見された輝赤色土器の出現をもってハラッパー文化の終焉とみなす。分布についてはカッチ地方からも数箇所の遺跡が報告されているほかは、大部分が北グジャラート地方、サウラーシュトラ半島西部と東部、南グジャラート地方それぞれの限られた地域に集中して分布が見られる。西方のシンド地方との結びつきは希薄となるが、一方で輝赤色土器はわずかながらネワーサなどデカン金石併用諸文化の遺跡からも発見されており、また共存する黒縁赤色土器が増加傾向にあるなど東方のインド半島部やラージャスターン地方とを結ぶ重要な役割を果たしたと思われる。

■まとめにかえて

インダス文明がグジャラート地方に進出した第一の目的は、インダス川平原部にはない石材を初めとする各種資源の獲得であったろう。ロータルで発見されたペルシャ湾式印章が物語るように、以前にくらべ限定的とはいえ、少なくとも前 2000 ～ 1800 年頃まではペルシャ湾岸方面との海洋交易も継続していたようである。また正確にいつどのように雑穀が導入されたかはまだ詳細は不明であるが、その新たな土地の開拓の中で夏季を生育の季節とする新しい穀物との出会いもあった。そしてそうした諸々の活動は、土着の文化やより東方の文化(の人々)との共存のもとに成り立っていたことが窺える。各地方ごとに、さらに各年代ごとにその実態の詳細を解明していくことが今後の課題にほかならない。

参考文献

- ・ Herman, C.F. (1997) 'Harappan' Gujarat: The Archaeology-Chronology Connection' *Paleorient* 22(2): 77-112.
- ・ Possehl, G.L. and C.F.Herman (1990) 'The Sorath Harappan: A New Regional Manifestation of the Indus Urban Phase' In M.Taddei (ed.) *South Asian Archaeology 1987*, Rome, IsMEO. pp.295-319.
- ・ Possehl, G.L. and D.P.Mehta (1994) 'Excavations at Rojdi 1992-93' In A.Parpola and P.Koskikallio (eds.) *South Asian Archaeology 1993*. Helsinki, Suomalainen Tiedeakatemia. pp.603-613.
- ・ Sonawane, V.H. and P.Ajithprasad (1994) 'Harappa Culture and Gujarat' *Man and Environment* 19(1-2): 129-139.
- ・ Varma, S. (1990) 'Changing Settlement Patterns in

Kathiawar' *Studies in History* 6(2): 139-161.

・ Varma, S. (1991) 'Villages Abandoned: The Case for Mobile Pastoralism in Post-Harappan Gujarat' *Studies in History* 7(2): 279-300.

インダスの土器 ハラッパー式土器 (2)

上杉彰紀 (総合地球環境学研究所)

前回は、考古学における土器研究の意義とインダス文明期の土器であるハラッパー式土器の研究の現状についてまとめた。今回は、具体的にハラッパー式土器がどのような特徴をもつのかまとめることにしたい。

ハラッパー式土器と総称されるのはインダス文明の時代に消長した土器様式の一つである。厳密に定義されたことはないのだが、モヘンジョダロ遺跡とハラッパー式土器で出土した土器資料をもってハラッパー式土器と呼ぶのが一般的であるが、インド・パキスタン分離独立後の考古学調査の進展によって、インダス文明の広がった範囲がかって考えられていたよりも広いことが明らかになるとともに、各地にモヘンジョダロ遺跡やハラッパー遺跡で出土する土器とは異なる土器様式が存在することが明らかになった。そうしたハラッパー式土器とは異なる土器様式がハラッパー式土器と共存して一つの遺跡から出土するのが特にインダス文明の縁辺地域(シンド・パンジャーブ西部地域を中核地域とみなすならばだが)において一般的な状況であることがわかってきたのである。

しかしながら、ここで問題となったのは厳密な意味でハラッパー式土器とは異なる土器を明確に地域の土器として捉える視点が稀薄であったことである。シンド・パンジャーブ地方に共通する土器の存在を重視するあまり、地域の土器伝統についてはあまり注意が払われなかったのである。確かに、ある特定の地域に特徴的な土器を抽出する研究視点も存在したが、インダス文明研究におけるそうした地域的土器様式の意義を積極的に問う研究は、先インダス文明期からポスト・インダス文明期への一貫した在地土器様式としての展開を説いた Y.D. Sharma のハラッパー式土器の研究を除けば、ほとんどなかったといっても過言ではないであろう (Sharma 1982)。

1980 年代にグジャラート地方の調査を進めた G.L. Possehl は特にロージディー遺跡の調査成果にもとづ

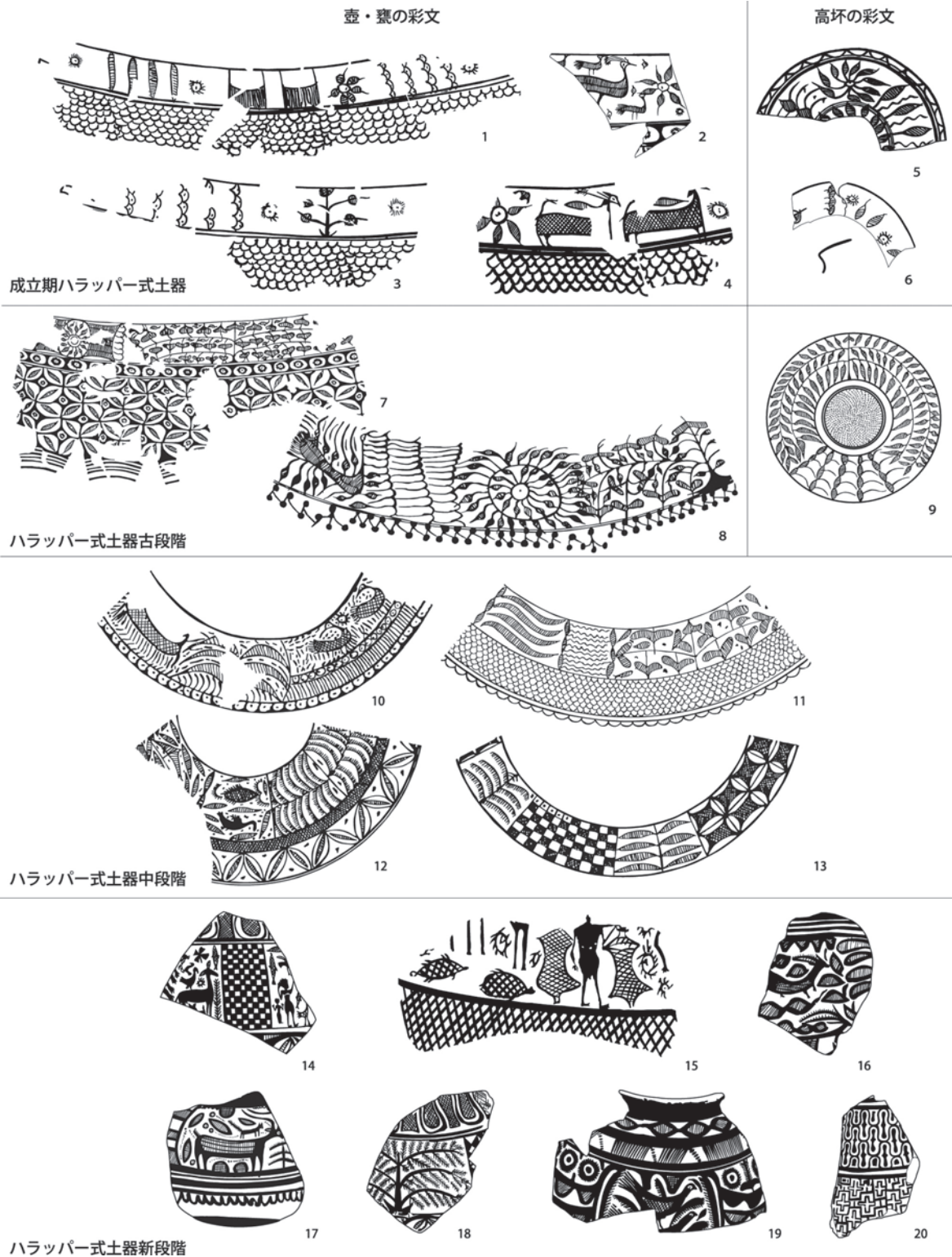


図1 ハラッパー式彩文土器の変遷試案 (上杉・小茄子川 2008)

いてソーラト・ハラッパー式土器という地域様式の存在を指摘したが、ソーラト・ハラッパー式土器についてもその定義は曖昧であって、土器様式としての構造を解き明かすまでにはいたらなかった。こうした土器資料の扱いに潜在する曖昧性は結局、厳密な意味でのハラッパー式土器と各地の土器様式との関係に対する理解を滞らせることになったのである。ハラッパー式土器の分布がイ

ングス文明社会の広がり把握する上での一つの手掛かりとされている研究の現状からみれば、ハラッパー式土器とは何かという厳密な定義が求められることはないであろう。

一つの遺跡から出土する土器を分析する上において、そこにどのような特徴をもった土器が存在するのか、それらがどのように生産され、遺跡の中で消費されたのか、

その背景に潜む歴史的・社会的意味は何なのか理解を進めていくためには、体系的な分類研究が不可欠であり、分類群に対する明確な定義が求められるのである。

\*            \*            \*

ハラッパー式土器は彩文土器と無文土器から構成されている。これは彩文の有無を基準にした大分類である。ハラッパー遺跡ではハラッパー文化期の全出土土器のうち彩文土器が占める割合は3～4%であることを踏まえると (Jenkins 1994: 321)、明らかに特別な土器として無文土器と作り分けがなされており、それはすなわち使用時の彩文土器に対する特別な意味づけが存在していることが推測できる。逆に無文土器は極言すれば大量生産・消費される土器と理解することができる。ここから彩文土器と無文土器という大別がハラッパー式土器の様式的構造を理解する上で意味のある分類であるといえるだろう。

彩文が施される器種についてみると、大形甕とS字形長胴壺が中心であって、それに高杯や壺が若干量伴う。文様の種類にも複雑な象形文や幾何学文を描いたものから単純な平行線文までさまざまであり、一概にはいえないものの、複雑な構成をとる文様は大形の甕や長胴壺が一般的であり、小形の器種には単純な平行線文が描かれることが多い。彩文土器の特別性という視点からみれば、複雑な彩文構成と単純な平行線文ではその土器様式のなかにおける意味は大きく異なるとみるべきであろう。

J.M. Kenoyer さんのご教示によれば、ハラッパー遺跡ではハラッパー文化期の古い段階に相当する3A期に複雑な文様構成をとる彩文土器が多く、3B期から3C期にかけて平行線文のみあるいは無文の土器が増加するという。一方、モヘンジョダロ遺跡ではその比率こそ不明であるものの、文明終末に近い時期にも独特な彩文土器が出土している。一つの文明社会の中においても彩文土器の時間軸・空間軸上における差異が存在している可能性を物語っており、そうした差異を把握し、文明期の土器様式の変遷を明らかにしていくことが求められよう。

図1はフランスの考古学者G. Quivronさんの研究成果 (Quivron 2000) を土台にして、小茄子川歩さんと協力して作成したハラッパー式彩文土器の変遷試案である (上杉・小茄子川 2008)。4つの段階に大別したが、上から順に追っていくと彩文の要素と構成が変化していくことがわかる。成立期のハラッパー式土器では大形甕の肩部に設けられる主文様帯の中に文様要素が並列的に

配置されている。それが古段階になると、文様帯全面を埋めるようにクジャク文やピーパル文が描かれるようになる。図2に示したラーキー・ガリー遺跡出土の彩文土器 (Vivek Dangiさんの所蔵品を筆者が図化したもの) でもS字形長胴壺の頸部に設けられた文様帯を埋めるようにピーパル文を中心とした彩文が描かれている。細かく描き込まれた彩文は彩文土器が特別につくられた土器であることを物語っている。中段階になると、基本的な構成は古段階に共通するものの、文様要素が変形したり文様の描出が粗雑になる。主文様帯に幾何学文が充填されるようになるもの前段階からの変化である。全体的に古段階よりも彩文が簡略化されたり形骸化する様子を看とることができる。新段階になると、複数の動物と植物を組み合わせた人物を挿入したりする風景文が登場する。また、中段階にも比して幾何学文が目立つようになる。

これはあくまでも現有資料を最大限に評価して提示した一案にすぎないのだが、彩文に時間の経過に伴う変化のある可能性を十分に示している。古段階までに成立した精密かつ複雑な彩文様式は文明期中頃には形骸化し、後半期には古段階とは似ても似つかない彩文様式へ



図2 ラーキー・ガリー遺跡採集のハラッパー式彩文土器 (Vivek Dangi 所蔵資料)

と変貌する。上に述べたように、彩文土器がハラッパー式土器様式の中で特別な意味をもった土器であるとするならば、その変化はインダス文明社会そのものの変化を一端にせよ反映している可能性が高い。筆者は新段階における変化の背景にパローチストーン高原南部に展開したクッリ式土器からの影響を考えている（近藤・上杉・小茄子川 2007）。

こうした特徴をもった彩文は文明期を通じて他の土器様式に描かれることはない。北東部のガッガル川流域に展開したソーティ・シースワール式土器には明確に異なる彩文様式が存在し、グジャラート地方に展開したアナルタ式土器やソーラト・ハラッパー式土器には幾何学文や平行線文のみであって、ハラッパー式土器にみられる形象文は描かれない。すなわち、ハラッパー式土器に登場する彩文はハラッパー式土器に独特のものである。ここに同じ文明期に展開した土器様式群とはいっても、ハラッパー式土器と他の土器様式との間に厳然たる差異が存在していることが理解できるであろう。ハラッパー式土器の彩文の変遷を明確にすることは、ハラッパー式土器と他の土器様式との差異を把握する一つの手段である。

現在のところ彩文土器が最も明瞭に変化を追うことのできる資料である。実際には無文土器においてもさまざまな時間的あるいは空間的变化が指摘されつつあるが、文明初期から終末までの変化を追うことのできる資料には乏しいのが現状である。膨大な層位的資料が蓄積されているハラッパー遺跡の報告を期待するところである。

今回は、ハラッパー式土器をひとまず置いて、先インダス文明期に消長したさまざまな土器様式について概観することとしたい。それはとりもなおさずハラッパー式土器の成立を考える上で重要な作業である。

#### 引用・参考文献

- ・ Jenkins, P.C. (1994) 'Continuity and Change in the Ceramic Sequence at Harappa', in A. Parpola and P. Koskikallio (eds.) *South Asian Archaeology 1993*. Suomalainen Tiedeakatemia, Helsinki. pp.315-328.
- ・ Sharma, Y.D. (1982) 'Harappan Complex on the Sutlej (India)', in G.L. Possehl (ed.) *Harappan Civilization: A Recent Perspective*. Oxford & IBH, New Delhi. pp.141-165.
- ・ Quivron, G. (2000) 'The Evolution on the Mature Indus Pottery Style in the Light of the Excavations at Nausharo, Pakistan' *East and West* 50(1-4): 147-190.
- ・ 上杉彰紀・小茄子川歩 (2008) 「インダス文明社会の成立と展開に関する一考察-彩文土器の編年を手掛りとして-」『西アジア考古学』第9号、101-118頁。

- ・ 近藤英夫・上杉彰紀・小茄子川歩 (2007) 「クッリ式土器とその意義-岡山市立オリエント美術館所蔵資料の紹介を兼ねて-」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』21、15-50頁。

### 考古学 GIS 班の調査経過 (2008 年度) 報告

寺村裕史 (総合地球環境学研究所)

山口欧志 (国際日本文化研究センター)

宇野隆夫 (国際日本文化研究センター)

#### ■調査の経過

インダスプロジェクト考古学 GIS 班は、2009年2月4日から同3月2日にかけて、インド・ハリヤーナー州ファルマーナー遺跡と、グジャラート州カーンメール遺跡において、本年度に実施した発掘調査成果の高精度記録をおこなった。用いた方法は、トータル・ステーションを用いた測量・図化、および写真測量であり、すべてのデータに世界測地系経度・緯度および標高値を付与している。またこの期間中に富山大学理学部・地球物理学班と協力して、両遺跡で遺跡探査と考古地磁気調査を実施した。

#### ■ファルマーナー遺跡

##### 1. 墓の写真測量

墓エリアでの調査では、墓遺構を70基近く検出した。写真測量による記録は、検出した遺構のうち、掘削が完了した遺構のすべてを対象とした。また、未発掘の遺構については、トータル・ステーションを用いてプランのみを記録した(図1)。今回実施した写真測量により、墓遺構の規模・主軸方向、墓坑深さ・墓に副葬された土器の配置、人骨の埋葬形態などを、3次元デジタルデータとして記録することができた。

##### 2. 住居エリアの写真測量

前項にて報告した墓エリアの東南東約900mの位置に、住居遺構や道路遺構から成る住居エリアが確認されている(図2)。また、墓エリアと住居エリアの間において、地表面で採集される多量の土器などの遺物は、墓エリアと住居エリアの間にも、遺跡が展開していた可能性を示唆する。

住居エリアでの調査では、発掘調査の面積が広く、検出遺構すべてを記録することは現実的ではなく、かつ昨年度の遺構プラン図が既に作成されているため、今回はいくつか遺構を絞って、火処や大型の土器を床面に埋め



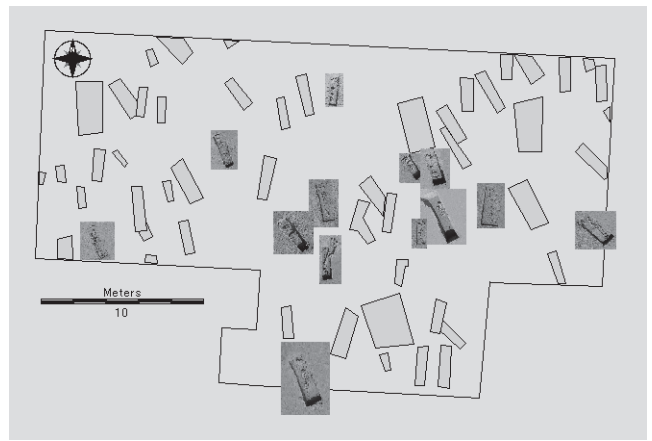
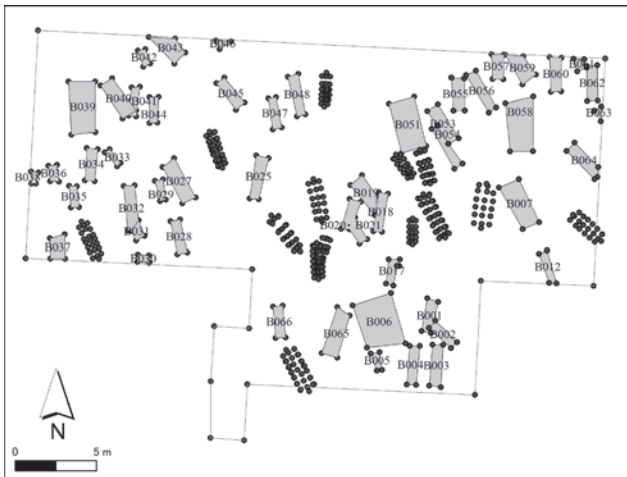


図1 ファルマーナー遺跡：墓のプラン図（左）と写真測量（右）

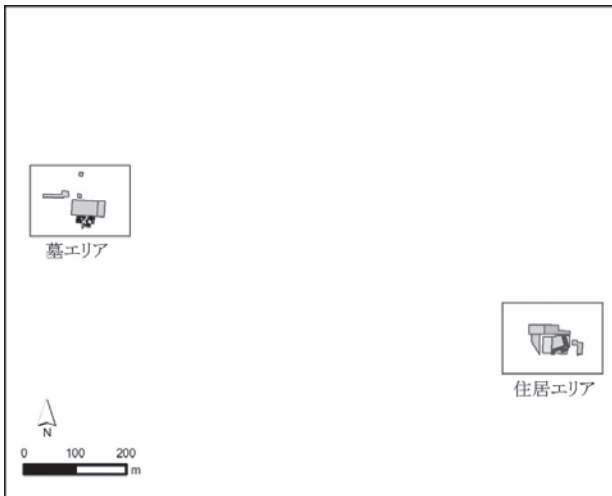


図2 墓と住居エリアの位置関係

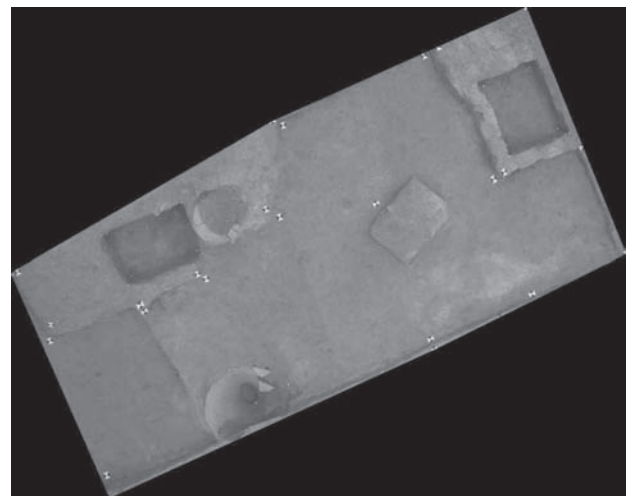


図3 住居エリア：遺構の写真測量（オルソ画像）



図4 カーンメール遺跡：東壁の写真測量



図5 北壁の写真測量

込んだ住居址など特徴的な場所の写真測量を行った。そのうちの 하나가図3であり、中央やや右上の土が赤く焼けた箇所では、考古地磁気の分析のためサンプルを採取している。

■カーンメール遺跡

1. 城壁の写真測量

今年度カーンメール遺跡の調査においては、城塞の東側と北側で前年度までに確認されていた城壁を、面的（平面・立面とも）に追うかたちで調査区を拡げ、長さ



図6 中央地区の遺構プラン図

30mほどに渡って壁面を検出した。そこで、図4・5に見られるような壁面の写真測量を行った。一連の城壁のつながり具合や石積みの様子がよく分かる。図4・5の両写真ともにオルソ補正をしているため、従来通りの石積みの立面図を作成する場合には、そのままトレースすればよく、写真測量は現場での作業時間の大幅な短縮となった。

## 2. 遺構プランの作成

さらに、カーンメール遺跡では、遺跡の中央地区において広い面積の発掘を実施した。この発掘結果について垂直方向の写真撮影をおこなうことが困難であったため、トータル・ステーションによる測量と図化をおこなうこととした。すなわち発掘された主要な遺構について、その上場と下場の主要なポイントについてトータル・ステーションを用いて三次元位置データを取得し、これに基づいてGIS上で住居の壁や床面や通路などの遺構の単位毎にポリゴンを作成して、重ねて表示した(図6)。

なお中央地区以外でも、西側城壁において発掘調査がなされたため、中央地区と同じ方で、記録をおこなっている。

## ■結び

考古学GIS班は、インダスプロジェクトの発掘調査成果のすべてについて共通した時間情報と空間情報を取得して、GIS上で管理・分析を実施することを目標にして作業を進めている。現在、作業量の問題から、すべてのデータをデジタル形式で記録することは困難であるが、紙ベースの記録にもデジタルデータと共通する位置データを与えて、GISデータとして使用できるようにしている。

この作業によって、城壁・建物・墓など遺構の規模や方位や配置など、発掘調査成果について、従来よりもはるかに正確な情報を取得することができるであろう。またこれによって各種の遺物や動物・植物遺体を含む環境情報が、遺跡内にどのように散布し、遺構配置とどのように関わるかをGIS上で分析することが可能となる。

今後、このような作業をさらに進めることによって、インダス文明遺跡においてどのような人の営みがなされたか、また人と環境・資源とがどのように関ったかについての解明を進めていきたい。

## ウィスコンシン大学南アジア学会に参加して

上杉彰紀(総合地球環境学研究所)

去る10月17日～19日に、アメリカ・マディソンにあるウィスコンシン大学にて第37回南アジア学会が開催された。500人を超す参加者があり、考古学から現代政治学にいたるさまざまなセッションが設けられた。考古学の部会に参加し、アメリカにおける南アジア考古学の現状に触れることができた。

考古学部会への参加者は30人程度と必ずしも多くないが、毎年南アジア諸国の研究者が招かれ、当地の研究者との交流を深めている。今年はインドからR.S. ビシュトさん(元インド政府考古局副長官)、R.S. フォーニアーさん(同発掘・踏査・出版局長)、V.S. プラバーカルさん(同アウランガーバード支局研究員)が参加し、最新の研究成果について発表された。

ビシュトさんはグジャラートにあるドーラーヴィーラー遺跡の発掘調査で知られるインド考古学界の重鎮である。これまでもさまざまな学会、研究誌にてドーラー



写真1 インダス考古部会会場の様子



写真2 ケノイヤーさんの説明を受けるビシュト博士とフォーニア博士

ヴィーラー遺跡の調査成果について発表されているが、今回は同遺跡出土の印章について発表された。150点ほどの印章が初期ハラッパー文化期からハラッパー文化期にかけて出土しており、モヘンジョダロ、ハラッパーに次ぐ多さの資料を提供している。層位ごとに印章の時間的変化を追うことが可能で、これまで十分に明らかにされてこなかった印章に関する情報が提示された。

フォーニアさんはこれまでほとんど調査の手が及んでこなかったヒマラーヤ山脈西部での調査成果について発表された。ヒマラーヤ山脈がインド世界とチベット、中央アジアをつなぐきわめて重要な役割を果たしていたことが報告された。インダス文明の時代にもヒマラーヤ山脈と平原部の交流関係が存在したことは、ブルザホーム遺跡の調査で明らかにされていたが、改めて山間地域の重要性が浮き彫りにされた。

ブラバーカルさんはドーラーヴィーラー遺跡出土のビーズおよびビーズ穿孔用ドリルについて分析を進めており、その成果について発表された。マイクロスコブを用いた観察結果とドリルの遺跡内での分布の検討を通して、遺跡内におけるビーズ生産の実態に迫ろうとするもので、分析方法およびその結果は近年のインド人研究者による研究の質の高さを示している。

ドーラーヴィーラー遺跡については、ウィスコンシン大学人類学科教授 J.M. ケノイヤーさんと博士号を取得したばかりの R. ロウさんが、ビシュトさんやブラバーカルさんらインド人研究者との共同研究を進めている。その分析・研究は緒についたばかりだが、膨大な知見がもたらされることは間違いないであろう。

このほかウィスコンシン大学の博士課程の学生を中心とした研究発表が行われ、着実にアメリカにおける南アジア考古学研究の層が厚くなっていることを実感した。私もインダス・プロジェクトによるファルマナー遺跡

の発掘調査成果について発表する機会を与えられた。

言語研究グループセミナー  
「文明と文字：記憶 vs. 記録」

大西正幸（総合地球環境学研究所）

今年の3月14日、言語研究グループは、熊本大学にて、熊本大学社会文化研究会との共催で、「文明と文字：記憶 vs. 記録」と題するセミナーを開催しました。インダス文字を含めた南アジアの「文字」の問題を取り上げ、文字による伝承と口承文化との関係に焦点を当てることを主眼としたセミナーで、「インダスプロジェクト言語研究会」のメンバーである長田俊樹、児玉望、北田信の3名が、それぞれ専門の立場から講演を行いました。

セミナーでは、大西の趣旨説明のあと、まず長田俊樹さんが、地球研およびインダスプロジェクトの概要を説明し、発掘の現状や、発見された遺物や遺構、特にインダス文明期の印章や封泥、土器に刻まれた文字など、新たに発見された文字資料の紹介をしました。

続いて、児玉望さんが、「非文字説と文明の継承—インダス「文字」 解読の動向」という題で、パルポラやマハデヴァンのドラヴィダ説やファーマーの非文字説など、インダス文字をめぐる最近の研究の動向について紹介し、それぞれの説の長所と短所をまとめました。そして、後半では、インドの文字文化は、歴史的変化が早く、なかなか統一した文字体系が確立しなかったこと、文字が後代の人々に忘れ去られたり、地域毎に著しい分化が見られるたりするなどの特徴があることを論じました。そしてこれらの現象の背景には、口承文化が主体で、文字による固定化を好まない、インド文化の根強い伝統があるのではないか、と結論づけました。



写真1 長田さんの発表の様子



写真2 児玉さんの発表の様子



写真3 北田さんの発表の様子

最後に、北田信さんが、「放浪者の言語—音声テキストと文字テキストの伝承」という題で、ベンガル地方の放浪詩人であるパウルの文字に頼らない口承文化と、ネパールのネワール人たちの、写本を頼りに伝承されるチャチャー歌の伝統を論じました。そして、どちらの伝承も、10-13世紀のタントラ仏教歌「チャリヤーパダ」にまで遡ること、パウルの伝承は、共通の内容、共通の比喩を用いながらも、時代や場所によって異なるテキストを創造しているのに対し、チャチャー歌はもはや意味を失った化石化したテキストとして伝承されていること、等を指摘しました。最後に、北田さんが現地です習得した、門外不出の歌の実演まで入り、熱気にあふれた講演となりました。

言語研究グループによる、地球研を離れてのセミナーは、これが初めての試みでしたが、3つの講演を通して、南アジアの文字文化の古代から現代に至る流れがまとまったイメージとして浮かび上がる興味深い内容となり、メンバー外の聴衆からも熱心な反応を得ることができました。小規模なセミナーながらなかなかの成功だったと言えると思います。

メンバーとしては、今後も、年に一度はこのような催しを開催したいと考えています。

## インダス・プロジェクト発掘調査報告会 2009

5月29日にインダス・プロジェクト発掘調査報告会が開催された。2008年度に行われたインドの2遺跡の発掘成果報告に加え、パキスタン考古局局長のF.D. カーカル (Kakar) 博士をはじめとするインド、パキスタンの考古学調査に関する幅広い発表が行われた。

報告会では、まず長田プロジェクトリーダーによる趣旨説明が行われ、次にカーカル博士により「パキスタンにおけるハラッパー文化の考古学的調査」と題し、その歴史と現況が丹念に語られた。

次にデカン大学 (インド) のV. シンデ (Shinde) 教授により「2008年度ファルマーナー遺跡発掘調査」と題し、広範囲に及ぶ住居址や墓群の発掘成果について報告された。次いで国立遺伝学研究所の斎藤成也教授により「ファルマーナー遺跡の古代DNA分析の可能性」と題し、2008年度に同遺跡の墓を実際に訪れた時の調査結果と今後の古人骨DNA抽出の可能性について語られた。今年度は遺跡より出土した牛の骨からまずDNAの抽出を試みる予定とのことである。

ラージャスターン・ヴィディアピート大学 (インド) のJ.S. カラクワール (Kharakwal) 教授からは「2008年度カーンメール遺跡発掘調査」と題し、検出された住居址や城壁、出土遺物などの発掘成果について報告された。

昨年に引き続き、2008年度に外国人研究員として地球研に滞在されていたマハーラージャー・サヤジラオ大学 (インド) のP. アジートプラサード (Ajithprasad) 教授から「2008年度シカルプル遺跡発掘調査」と題し、発掘成果について報告された。今年度の調査では当プロジェクトからは宇野教授をはじめとする物質文化研究グループから数人調査に参加し、写真測量や地中レーダー



写真1 F.D. カーカル博士

探査を行った。

2007年度に外国人研究員として地球研に滞在されていたシャー・アブドゥル・ラティーフ大学（パキスタン）のQ.H. マッラー（Mallah）教授からは「シンド地方ハークラ川下流域における考古学調査の進展」と題し、同大学で実施しているタール砂漠での踏査と発掘調査の成果が報告された。

以上が発表内容であるが、翌日に開催されたラウンドテーブルの発表者の方々も多数参加していただき、興味深い指摘やコメントを多数寄せられた。昨年度で発掘調査も終了したということもあり、例年以上に有意義な報告会であった。（遠藤 仁）

### ハーヴァード大学・地球研共催ラウンドテーブル

5月30・31日にハーヴァード大学と地球研長田プロジェクト、佐藤プロジェクトとの共催で「第13回ハーヴァード大学ラウンドテーブル 南アジアと中央アジアにおける民族集団の形成 (Ethnogenesis of South and Central Asia (ESCA))」が開催された。農耕の拡散や家畜化、考古学、言語学、遺伝学といった様々な視点をテーマとしたもので、2日間4セクションに分かれて日本、インド、アメリカ、オーストラリア、フィンランド、台湾から第一線で活躍する研究者を集めてのラ

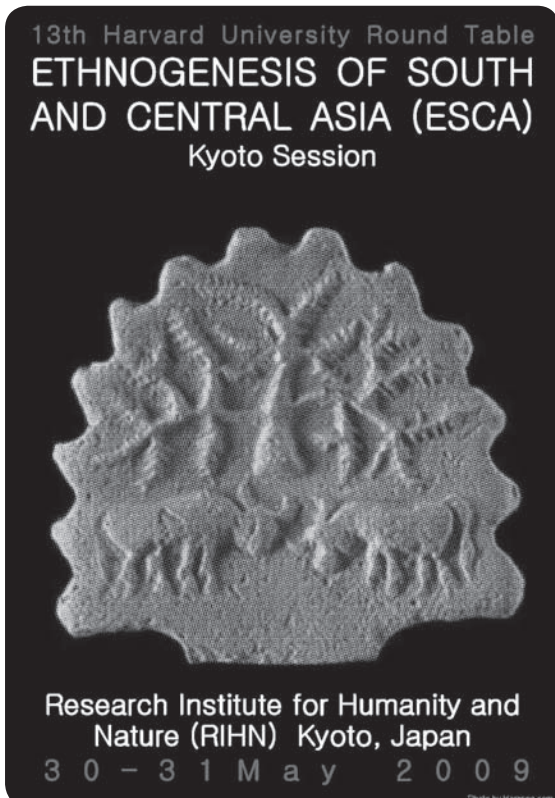


写真1 M. ヴィッツェル博士



写真2 R. メドウ博士

ウンドテーブルであった。各発表の内容は以下のとおりである。

#### 1. アジア、特に南アジアにおける農耕と家畜の拡散

- ・佐藤洋一郎（総合地球環境学研究所）：趣旨説明
- ・楨林啓介（総合地球環境学研究所）：長江流域の稲作文化は1つではない
- ・細谷葵（総合地球環境学研究所）：農耕民の野生植物利用—稲作社会の多様性についての一考察
- ・S.A. ウェーバー（ワシントン州立大学）：インダス文明における農耕戦略—新たな栽培植物、地域性および気候適応化
- ・竹井恵美子（大阪学院大学）：大きく異なる2つのミレット—アジアの *Setaria italica* と *Spodiopogon formosanus*
- ・R. メドウ（ハーヴァード大学）：南アジアと東アジアにおける家畜の拡散

#### 2. ハラッパー考古学における最近の動向

- ・上杉彰紀（総合地球環境学研究所）：趣旨説明
- ・J.M. ケノイヤー（ウィスコンシン大学）：墓地の構成、層序および編年—ハラッパー遺跡の調査から
- ・B. ヘンフィル（カルフォルニア州立大学）：ハラッパー遺跡—南アジアの人類史における青銅器時代文明の人々



写真3 ラウンドテーブル参加者

の役割

・V. シンデ (デカン大学) : 前3-2千年紀のガッガル地方およびカッチ地方における埋葬行為—その分析

・P. アジートプラサード (マハーラージャー・サヤジラオ大学) : グジャラート地方におけるハラッパー文化期の埋葬

3. 南アジアとアラビア湾岸の交流—インダス文字の問題を含めて

・長田俊樹 (総合地球環境学研究所) : 趣旨説明

・S. ファーマー (文化類型研究会) : 「インダス文字研究の崩壊」論の5年後—古代ユーラシアにおける文字をもたない文明

・D. ボッツ (シドニー大学) : 前3千年紀後半の4つの世界—ウル・シマシュキ・メルッハ・マガン

・A. パルポラ (ヘルシンキ大学) : ハラッパー文化、ドラヴィダ語およびインド・イラン語における野生アジアロバ

4. インドにおけるコムギの多様性と言語多様性—DNAと言語の多様な世界

・佐藤洋一郎 (総合地球環境学研究所) : 趣旨説明

・笹沼恒男 (山形大学) : アフガニスタンの在来コムギの遺伝的多様性とその栽培の将来性

・巖新富 (台湾自然科学博物館) : 台湾の魯凱族が営む農業の生物多様性の伝統的管理

・M. ヴィツェル (ハーバード大学) : ヒンドークシュ山脈とパミール高原における言語多様地域—栽培植物の語彙

発表者を含め50名ほどの会であった。なお、この会の内容はハーヴァード大学から出版されるとのことである。(遠藤 仁)

## 発掘調査報告書作成に関わる協定締結

インドで行ってきたファルマナー遺跡とカーンメール遺跡の発掘調査は昨年度で終了し、今年度以降は報告書作成を進めます。そこで、2009年6月1日に長田俊樹教授とデカン大学のシンデ教授、ラージャスターン・ヴィディアピート大学のカラクワール教授との間で発掘調査報告書作成に関わる協定が締結されました。2011年刊行予定の両遺跡の発掘調査報告書の作成に向けて、より一層の連携が求められています。(遠藤 仁)



写真1 協定締結の様子

## 編集後記

この4月から新たに地球研に入りました。いろいろと不慣れでご迷惑をお掛けすることも多いと思いますが、よろしくお願ひします。

最後になりましたが、今号にご寄稿くださった方々に篤く御礼申し上げます。(遠藤)

## インダス・プロジェクト ニュースレター 第5号

プロジェクトリーダー 長田 俊樹  
編集・発行 インダス・プロジェクト  
発行日 2009年6月30日

〒603-8047 京都府京都市北区上賀茂本山457-4  
大学共同利用機関法人 人間文化研究機構  
総合地球環境学研究所  
URL: <http://www.chikyu.ac.jp/indus/index.html>

## インダス・プロジェクト ニュースレター

第6号

2010年1月25日発行

### ごあいさつ

われわれのインダス・プロジェクトは、本研究三年目を終えようとしています。来年度から後二年で、インダス・プロジェクトの成果をまとめなくてはなりません。このニュースレターは主にフィールド調査を行った人々の簡単な報告を掲載してきました。論文といった堅いものではなく、紀行文エッセイのように、執筆者も気軽に書いていただきたいですし、読む側も気楽に読めるものでありながら、同時にプロジェクトの活動を知ることができる。そんなニュースレターをめざしています。

昨年度までのプロジェクトでは、遺跡の発掘調査がメインを占めていましたが、本年度からは発掘調査を終え、終了年度に向けてまとめの段階に入りました。ある意味、発掘以上に大変な作業が待っています。インドにおける二遺跡の発掘報告書は来年度中の刊行をめざして、奮闘しております。乞う、ご期待。

本年度のフィールド調査では、古環境復元研究グループがネパール・ララ湖でコアリングを行いました。8月末から先発隊が入り、ほぼ1ヶ月を要しましたが、無事コアリングに成功し、これからの分析結果を待っています。今回のニュースレターには、その際の活動報告を日記という形で掲載いたしました。楽しく読んでいただければ幸いです。

なお、今回掲載した三浦さんの報告はすでに前回のニュースレターに間に合うように送っていただきながら、掲載できなかったものです。この場で三浦さんに謝罪するとともに、今後はこういうことがないよう、細心の注意を払っていく所存です。

プロジェクトリーダー  
長田俊樹

### コスメとサブリとグローバルトレード —カーンメール農業事情—

三浦励一（京都大学）

インダス・プロジェクトにおける生業班の役割のひとつに、現代における遺跡周辺地域の生業形態や生態環境を記述することがある。これは、発掘成果から当時の人々の生活や周囲の環境を再構成しようとする際に、一種のレファレンスとして役立つだろうとの考えによる。このような調査のためには、対象地域がなるべく近代化されておらず、できることなら自給自足的な生業形態をとどめているほうが都合がよい。カーンメールのような辺境ならば、その条件にあてはまるのではないかと思っていた。それがあっさりと裏切られてしまったというお話である。

2009年1月、私はカーンメール村の航空写真を持って歩き回り、耕地の1区画ごとに冬作（または夏～冬作）として何が栽培されているかを記録してみた。その集計はまだできていないが、一見して栽培面積の大きかったものは、ワタ、ヒマ、マスタード、クミン、コムギと、初めて目にするインドオオバコの6種であった。ガンジーの時代からグジャラートが綿花の産地であることは有名だし、インドで重要な食材であるマスタード、クミン、コムギが作られているのもわかる。しかし、ヒマとインドオオバコは何のためにこれほど大量に栽培されているのだろうか？ 少なくとも、村内で消費されるものではない商品作物であることは聞き取りでわかった。また、これらの作物が、カーンメール村だけでなくカッチ地方の広い範囲で大々的に栽培されていることも、車窓からの眺めでわかった。その先は、帰国後に文献とインターネット検索で調べることにした。以下はそのまとめである。



図1 ヒマ

ヒマ（図1）は、トウゴマともよばれ、学名は *Ricinus communis*。種子からヒマシ油（蓖麻子油、castor oil）が得られる油料作物である。ヒマの種子には強い毒性があるが、油を絞った際、毒成分は絞りかすのほうに残る。ヒマシ油は食用にはならないものの、古来、灯用および薬用（下剤・皮膚病薬）として使われてきた。ヒンディー名は Arandi。サンスクリット名は Eranda となっているが、文献にどのような形で現れるのかは調べていない。

現在、世界のヒマ種子の65%はインドで生産され、さらにインド国内生産の86%をグジャラート州が占めている。アーメダバードやブジの周辺には、ヒマシ油を絞って精製する工場がいくつもある。近年の統計では、インドは毎年15～20万トンのヒマシ油を輸出しており、これはインドに60～80億ルピー相当の外貨をもたらしていると考えられる。ヒマシ油を大量に輸入しているのはEUとアメリカで、日本も年に2万トンのヒマシ油を輸入している。この大量のヒマシ油は、先進国でどのように使われているのだろうか。

調べてみてわかったことだが、ヒマシ油は一般的な他の油脂と異なり、化学工業的にさまざまに性質を変えることのできる特異な化学構造をもっており、化粧品、医薬品、潤滑剤、塗料、インクなどに配合される基材の合成原料として欠くことができない。このため重量あたりの価格はナタネ油やダイズ油の3倍になるという。車やオートバイが好きな人なら、エンジンオイルの有名ブラ

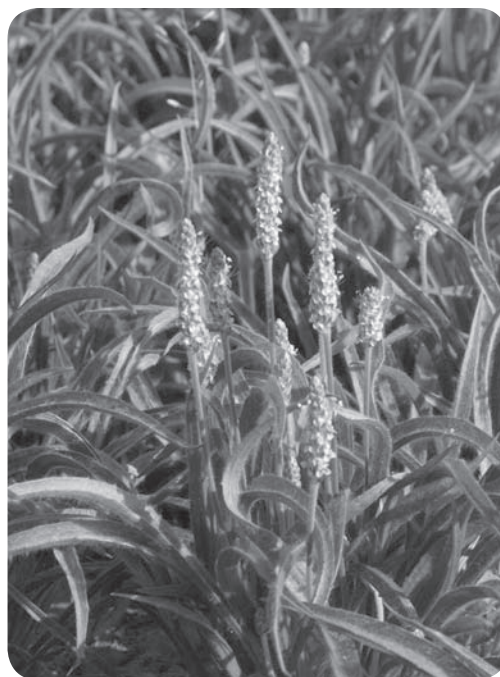


図2 インドオオバコ

ンド Castrol を知っているだろう。この名称は、同社の初期の製品で原料とされたヒマシ油の英名 castor oil に由来しているという。

化粧品類の成分表をよくみれば、「ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油」とか、「PEG-40 水添ヒマシ油」などという名前が見つかるだろう。これらはヒマシ油に化学的な修飾をほどこしたもので、水とも油ともなじみやすく、本来混じり合いにくいさまざまな配合成分を均一な液状、乳状あるいはクリーム状に保つはたらきをもっている。ナチュラルやオーガニックをうたう化粧品には、精製ヒマシ油そのものが配合されていることもある。こんなわけで、「コスメ」のびんやチューブを手にとってみたとき、その中に何らかの形でグジャラート産ヒマシ油が含まれている確率は、かなり高い。

次にインドオオバコ *Plantago ovata* (図2) であるが、別名サイリウム、イサゴールといえは「え！もしかしてあれのこと？」とピンとくる人もいるだろう。いわゆるオオバコダイエットに用いられる、サプリメント食品の原料植物である。インドオオバコの種皮の表面には多糖類の層があり（日本のオオバコにも少しある）、これが水を吸うと膨らんで寒天のようになる。食事の前に水や野菜ジュースでその粉末を飲むと、胃の中で水を吸って膨張するので、食事を控えめにしても満腹感が得られるというわけだ。さらにこの寒天状物質は糖やコレステロールの吸収を抑制する効果もあるし、食物繊維であるから便通もよくなり、一石三鳥くらいの効果があるとい



うことらしい。

インドではこの植物は isabgol とよばれている。これは「馬の耳」を意味するペルシャ語名からきているそうで、種子の形がそれを連想させることによる。日本では「イサゴール」と表記されているが、カーンメールでは小さく b の発音が入るように聞こえた。欧米では植物名が psyllium、その種皮が isabgol と表記されている。

世界のインドオオバコのほとんどすべてはインドで生産されている。生産の中心はラジャスタン州にあるが、集荷・取引の中心地はアーメダバードからカーンメールに向かう道をちょっとそれたところにある Unjha であるという。水を吸うと寒天状になる種皮を収穫して出荷するには水に濡らさないようにすることが肝心で、種子の成熟期から収穫期にかけてはわずかの降雨も大敵である。冬から春にかけて絶対に雨の降らないインド西部は、この植物の栽培適地というわけだ。

インドオオバコの市場状況についてはかけ離れた数字がいくつかあって正確なところはわからないが、ネット上のある情報によれば近年のインドでの生産量（種子）は9万トン前後であり、その80%が輸出されており、価格は1kgあたり40ルピーかそれ以上。この数字を信じるならば、インドオオバコはインドに年29億ルピー相当の外貨をもたらしていることになる。なお、最大の輸入国はというと、その効能から容易に察しがつくとおり、アメリカ合衆国である。アメリカのオオバコダイエット商品ではP&G社の「メタムシル」が有名らしい。

いささか胃がもたれる話になってしまったかもしれない。ともかくこのようにして、現代のカーンメールの農業は世界経済に片足をつっこみ、わたしたちの現代生活とつながっているようなのである。それも、受け身でそのような状況にからめとられていたということではないらしい。話を聞いたある農家は、インドオオバコはもうかるといふから種を買って作ったのに、いざ出荷のときになったら期待したほどの値がつかないと不平を言っていた。次に会ったときのあいさつは、「もうかりまっか？」にしようかと思う。

参考ウェブサイト

<http://www.articlearchives.com/marketing-advertising/price-management-price/1781319-1.html>

<http://www.business-standard.com/india/storypage.php?autono=281496>

<http://www.crnindia.com/commodity/castor.html>

<http://www.thehindubusinessline.com/2008/02/20/stories/2008022051151500.htm>

[http://en.wikipedia.org/wiki/Castor\\_oil](http://en.wikipedia.org/wiki/Castor_oil)

<http://en.wikipedia.org/wiki/Psyllium>

※相互に重複する情報が多いので、文章に対応させずに一括して挙げた。

## ウッタラカンド州の実地調査とビンサル・セミナー

大西正幸（総合地球環境学研究所）

今年の7月2-5日に、長田、大西、カラクワールは、ウッタラカンド州の東部、ビンサル（Binsar）のカーリー・エステイト（Khali Estate）で開かれた、'The Himalayan communities, cultures and traditional knowledge: the twenty-first century challenges and strategies for conservation' というタイトルの国際セミナーに参加しました。また、セミナーの前後、長田と大西は、カラクワールさんの案内で、彼の生まれ故郷の村や周辺の地域を調査しましたが、旅行中、彼の二人のお兄さんとそのご家族（長兄とその家族がアルモラー（Almora）、次兄とその家族がカータゴードム（Kathgodam）に住んでいる）からは、まさに至れり尽くせりのおもてなしを受けました。以下、この時の体験を、大西の視点から、日誌風に報告します。

### 6月28日

大西はカルカッタから飛行機でデリーに到着。すでに到着していた長田さん、カラクワールさんと、ニューデリーのホテルで合流する。その夜、オールドデリーの駅から、カータゴードム行きの夜行寝台列車に乗る。

### 6月29日

朝6時前にカータゴードム駅に到着。カラクワールさんが手配してくれていた車に乗り、まず、駅の近くにあるカラクワールさんの次兄の家に立ち寄り、朝食をご馳走になる。ジャガイモのパラター（バター油ギーを折り込んだ焼きパン）がおいしい。ご家族や、たまたま訪問されていたカラクワールさんの四兄、妹さんなどと歓談する。8時頃、皆に見送られて、ナイニタール（Nainital）に向かう。

ナイニタールは、英領時代から続く有名な避暑地で、湖の周辺にはインド人旅行者向けの小さなホテルが軒を



ナイニताल

並べている。湖の両側の急な勾配に沿って細い道が続き、それを辿って谷の中腹まで登ると、英領時代の古い建物が多く残っている。英領時代は、湖の周辺の低地が現地人ネイティブ（つまりインド人）の居住区で、白人の居住区は湖を見下ろす高台に作られたということだ。ここでは、カラクワールさんの大学の友人、ギリジャー・パーンデー（Girija Pande）さんの案内で、地元の新聞「ナイニताल・ニュース」（Nainital Samacar）の編集／出版を長年続けているマヘーシュ・ジョーシー（Mahesh Joshi）さんや、ヒマラヤ地域の伝統文化／社会の記録を40年以上続けているシェカル・パータク（Shekhar Pathak）さんの家を訪問。その道すがら、英領時代の療養所兼パン工場だった広大な建物を見学する。ギリジャー・パーンデーさんの家で昼食をご馳走になった後、ナイニतालの町の外に住む、著名な歌手／詩人で森林保護運動の旗手だったという、ギルダ（Girda）の愛称で知られるギリッシュ・ティーヴァーリー（Girish Tewari）さんの家を訪問、歌やインタビューを録音する。その後、山間のくねくねした道を車で2時間ほど走り、もう一つの避暑地アルモーラーに到着。まずカラクワールさんの長兄の家に寄り、その後、目指すD. P. アグラール（D. P. Agrawal）さんの家に向かう。彼は、長田さんとカラクワールさんの友人で、長田さんの日文研時代に日本を訪れたことがある。大学を引退後、この自宅をオフィスに、「民俗知センター」（Lok Vigyan Kendra）を立ち上げ、民間に伝わる伝統文化の継承に力を注いでいる。今回のセミナーを企画運営したのも彼だ。彼のオフィスに、セミナーの運営を手伝っている若いスタッフが、入れ替わりやってくる。

4人でセミナーの打ち合わせをした後、この日、長田さんと私はそのままアグラールさんの家に泊まる。



カラクワールさんとその家族

### 6月30日

朝、猿が屋根を伝う音で目が覚める。寝室の外側にある廊下兼小部屋の窓から外を見ると、ベランダを我が物顔で徘徊する猿たちの姿が見える。その下には、アルモーラーの谷が一望のもとに見渡せる。急な斜面に沿って人家の屋根やベランダが隙間なく並び、谷の向こうは少し朝靄がかかっている。

長田さんと私は、午前中、若手のスタッフの案内で、女神ナンダー・デーヴィー（Nanda Devi）のお寺や、町のバザールを見て回る。ナンダー・デーヴィーは、ウッタラカンド州に聳える、インド国内では2番目に高いヒマラヤ山系の山の名であるが、同時にこの地域で最も人気のある女神として神格化されている。この女神は、伝承では、シヴァ神の奥さんから村の娘まで、いくつもの層にわたる役割を担い、この地域を中世に支配したチャンド王朝の守護神でもあった。周辺の少数民族が育んで来た基層文化と後から来たヒンドゥー教との混淆を、象徴的に示す例である。

見学から戻り、お昼過ぎに、迎えに来てくれたカラクワールさんと、同じ市内にある彼の長兄の家へ向かう。長兄の家族に加え、高齢のお母さん、昨日会った四兄等と歓談、昼食をご馳走になる。昼食後、カラクワールさんの故郷の村に向かう。カラクワールさんの二人の姪も手伝いに来てくれるというので、5人で2台の車に分乗して行くことになる。

アルモーラーから小1時間で村の入り口に到着。村全体がカラクワール姓の、農耕を営む人たちで構成されているのだと言う。村の入り口から荷物を担いで15分ほど畦道を歩き、カラクワールさんの家に辿り着く。お母さんがアルモーラーの長兄の家に移ってしまったので、家にはしばらく、誰も住んでいない。長屋風3階建て



カラクワールさんの故郷の村

田植えと儀式

の家で、1階は牛のための糞などが入った納屋。美しい模様が彫り込まれた入り口から階段をのぼり、2階に入ると、前面が寝室兼居間、建物の後ろ側が神棚や竈のある家の中心部になる。3階は建物の後ろ半分に部屋があるだけで、ふだんは物置に使われているのだろうが、私たちの滞在中は台所代わりになっていた。その部屋の前が屋上のベランダに続いている。この建物全体が、階段を挟んで、だいたい同じ作りの隣家と接している。前庭には、近所の人たちとの行き来や、稲の収穫時には脱穀などにも使われるのであろう、開かれた空間があり、その向こうに、2頭の牛を繋いだ仕切りと、野菜を植える小さな畑がある。東インドの、中庭をコの字型に囲んで、一つの大家族で閉じた空間を作る家の作りに慣れていた私の目には、この家の作りは大変新鮮に映った。屋上のベランダからは、村全体が見渡せる。見渡す限り、緑の棚田と森に囲まれた、日本の農村といっても通用しそうな光景である。

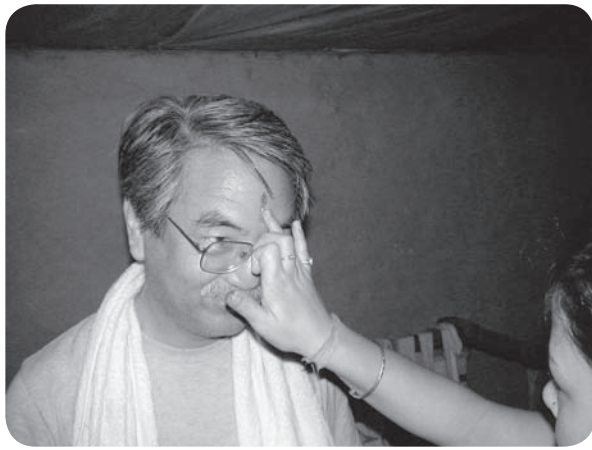
### 7月1日

この日は家の中や村を探索した。まず朝食前に、2階の、私たちが泊まっていた寝室の奥側にある部屋部屋を探索する。家の守護神を祭る神棚のある部屋、竈のある

本来の台所があり、米の大きな貯蔵櫃、ギー（バター油）やヨーグルトを入れる容器等、米と、牛や水牛のミルクの加工品が中心の、豊かな食生活が伺える日用品がたくさん並んでいた。

朝食のあと、今度は、家を出、畦道を通って、村の鎮守のお寺に向かう。カラクワールさんの他、隣家の男性も案内に着いて来てくれる。途次、カラクワールさんから、薬用に使われるさまざまな野草について、また、路上にある銅の破片と、このあたりで銅の精製が行われていたこととの繋がりを教わる。

鎮守のお寺は、中にこれといった神像は置かれていなかった。カラクワール村の外郭に住むラーム（指定カースト）姓の人々もお参りできるのだと言う。ヒンドゥー色が薄いのはそのためだろうか。寺の前に灰や土の盛り上がった箇所があったが、ここで年に一度、ラームも含めた村中の人々が集まって火を焚き、その周りで踊り、料理した食べ物を食べ、祝うのだそうだ。この後、隣村の鎮守のお寺も訪れたが、まったく同様だった。歩いて行く途次、田植えをしている女性たちの一群に会い、田植え歌を録音させてもらった。横一列に並んで歌いながら田植えをする様子は、さながら日本の昔の農村風景で



出立の儀式

ある。田んぼのすぐ横の畦道には、儀式に使われるのであろう、葉の上に米粒と赤い辰砂を入れたものが置かれていた。

お昼まで散歩して、村の入り口まで戻ると、ちょうど学校を終えた子供たちが歩いて帰ってくるのとすれ違った。カラクワールさんの知り合いの店でお茶をご馳走になる。

帰宅すると、隣家から昼食に招待され、カラクワールさんの二人の姪も含めた五人で出かけることになる。黒いダール豆とご飯のキチュリ(おかゆのような混ぜご飯)だった。ついでにこちらも家の中を見せてもらう。午後のはんびりと過ごし、私は、お母さんの命令で庭仕事に精を出すカラクワールさんから、仕事の合間合間に、この地域の年間の儀礼や暦、民間伝承について教わった。

### 7月2日

6時に起きて出発の準備をする。出発前、出立の儀式がある。私も長田さんも、家の神棚のある部屋で、額に赤と黄の印と米粒をつけてもらう。出かける直前になって、2軒隣の家から突然招待を受ける。田植え前の会食をしていて、ぜひ食べて行けと言う。この村に来た時から、そのいかにも人の良さそうな笑顔で私と長田さんを魅了していた老人である。それでいちおう招きを受けて二人で家の中に入り、会食している人々に挨拶をし、ハルア(甘菓子的一种)をいただいただけで辞することにする。

村の入口で、車が来るのを待つが、なかなか現れない。その間に、憑依によって治療を行う、伝統的な治療師が通りかかったので、その人と話をする。

10時半に2台の車が到着。2日間の滞在の別れを告げて、アルモーラーへ向かう。

アルモーラーでは、またカラクワールさんのお兄さん



セミナーの様子

の家で一服し、2人の姪に別れを告げて、私たち3人で、ビンサールに向けて出発。1時間あまりでカーリー・エステイトに到着。ビンサールは中世のチャーンダ王朝の王都で、現在はヒマラヤ山系を見渡す高原の避暑地となっている。会場となったカーリー・エステイトはヒマラヤ山系を目の前に見渡す広大な敷地に建てられた宿泊施設。中心の邸宅は英領時代にイギリス人によって建てられたもので、ガンディーが滞在していたこともあり、その時使われた書斎も保存されている。敷地内に広々とした2階建ての円柱形のバンガローがいくつも建てられ、我々はそれぞれその1室を割り当てられる。ピュッフェ形式の昼食のあと、セミナーが午後3時過ぎから始まる。

### ビンサール・セミナー (Binsar Seminar) :

#### 7月2日午後—5日午前

このセミナーは2つの団体の共同によって主催された。一つは、前述の通り、D. P. アグラールさんが代表を務め、ヒマラヤ地域の伝統文化の記録/保存活動を行っている、民俗知センター。もう一つは、ガネーシュ・デーヴィーさんが代表を務め、主に西インドの少数民族の言語や文化の記録/継承活動にかかわっている言語醇化出版センター (Bhasa Samshodhan-Prakashan Kendra) である。

セミナーは次の3つのセッションに分かれ、3日間で計20の、実に多彩な内容の発表があった。最終日の7月5日は発表がなく、午前中を使っての総括討論となった。

1. Traditional Knowledge, Oral Traditions, Art Practices and Life-styles



セミナーの出席者たち

- 2. Himalayan Environment — Ecology and Economy
- 3. Communities — Culture, Social Transition and Negotiating Modernity

私は 'Documenting the Oral Culture of Bengal' という題の発表を最初のセッションで、またカラクワールさんと長田さんはそれぞれ 'Rice Rituals and Agricultural Rites in Central Himalayas', 'Rice Rituals among Mundas of Jharkhand' という題の発表を、2つ目のセッションで行った。長田さんは初日、二日目と体調を崩していたので、予定をずらして7月4日の夕方の発表となったが、発表開始と同時に突然大雨が降り出すというハプニングに見舞われた。ともあれ、3人も発表は順調に終わり、参加者からは多くの好意的なコメントや情報が寄せられた。

ところで、このセミナー全体のタイトルは 'Himalayan communities' となっており、確かに発表者の大部分はヒマラヤ地域の伝統知にかかわって来ている人たちののだが、私たちやガネーシュ・デーヴィーさんのように、専門が必ずしもヒマラヤではない人たちもいたし、アグラールさんの基調講演やガネーシュ・デーヴィーさんの総括では、グローバリズムによって失われつつある伝統知というコンテクストの中で、インドの知的伝統を総動員して、どのような行動を取るべきか考えよう、というふうな問題が立てられていた。だから、ヒマラヤの問題を、個別の問題としてではなく、インド全体、あるいは世界全体で失われつつある伝統知の継承という視点から捉えるという視点ははっきりしていて、私たちの発表もその点では多に貢献できたように思う。このようなテーマのセミナーがインドで開かれるというのは、画期



チタイー寺

的なことではなからうか。

また、私たちとしては、セミナーを通して、インドの基層文化の記録活動を担っている研究者たちと交流でき、密接な協力関係を築くことができたのは大きな収穫だった。

### 7月5日

セミナーが無事終わり、昼食を取ったあと、参加者はみな、三々五々、別れを告げてピンサールを去って行く。私たちもアルモーラーに向けて出発。いったんカラクワールさんのお兄さんの家に行き、疲れの出た長田さんをそこに残して、私、カラクワールさんと二人の姪の4人で、郊外にある古いシヴァ神の寺院ジャーゲーシュワル寺 (Jageshwar Temple) を見に出発する。

ジャーゲーシュワル寺はアルモーラーから三十数キロ、1時間あまりのところであり、途中、ヒマラヤの全景が見渡せそうな眺望の峠まで上ったあと、谷を一気に下って、ヒマラヤ杉の鬱蒼と茂る川沿いの道をしばし行く。その道の行き止まりに、9世紀から13世紀にかけて建てられたという大小の石造りの寺院が並んでいる。シヴァ神とその妃神たちの、さまざまな寺院である。当

時、東インドも含むインド各地から巡礼者たちがやって来たということで、大きな寺院の壁には当時のブラーフミー文字でたくさんの落書きが書かれている。私は仏教が伝わった跡でもないかと思って気をつけていたのだが、そのような痕跡は見つからなかった。寺院の近くにある博物館を見るのを楽しみにしていたのだが、残念ながら閉館の時間にかかってしまい、中を見ることができなかった。

帰る途次、チタイ寺 (Chitai Temple) に立ち寄った。ここはシヴァ神の生まれ変わりとされる「正義の神様」ガウル神 (Golu Devata) のお寺で、山のような裁判文書が、たくさんの寄贈された鉦とともに飾ってある。裁判で正義の裁きがあるよう祈願して、インド中から手紙を送って来る人が絶えないという。ガウル神は、民間伝説では、チャンド王朝の正嫡の王子で、継母や異母兄弟からさまざまな迫害を受けるが、最後には王子として認められることになるという。寺院の中には、その颯爽と白馬にまたがる姿が飾ってある。

こうして日暮れ時にアルモラーに帰還。少し元気になった長田さんと、帰る荷物の整理をし、カラクワールさんやその姪たちとは写真等の資料の交換をする。夕食の後、早々に休む。

## 7月6日

早朝、6時に起きると、出発前に、また額に赤と黄の印と米粒をつける出立の儀式がある。車を待つ間、ご家族が軽食を用意してくれる。カラクワールさんのお兄さんからは、ガネーシュ神の像をお土産にいただく。別れを惜しみながら、車に乗り込み、出発。

カラクワールさんは、病気の三兄を見舞いに行くとのことで、途中のハルドワーニー (Haldwani) で別れる。その後、快適なドライブが続き、私と長田さんは、夕方、無事デリーに帰還。

こうして、一週間あまりの充実した旅が終わりました。カラクワールさんやそのご家族には、旅行期間を通して、何から何まで世話をさせていただきました。この場を借りて、改めて感謝したいと思います。また、今回の調査やセミナーで知り合った研究者とは、インドの少数言語や基層文化の研究をめぐって、データや情報の交換、言語研究班のメンバーとの共同の調査等を通して、今後も交流を続けて行くつもりです。来年もまた、そうした活動の報告ができればと考えています。

## ララ湖コアリング調査隊日記

### ■はじめに

長田俊樹 (総合地球環境学研究所)

インダス・プロジェクトでは、昨年8月末から9月中旬にかけて、ネパール・ララ湖でのコアリングを行いました。無事コアリングに成功し、5本のコアを採取することができました。船便で日本まで運ばれ、12月末ようやくコアが高知大学に到着しました。したがって、分析はまだ始まったばかりです。

コアリング調査のメンバー (以下敬称略) は、下準備を行なった古環境復元研究グループのコアメンバーの前杵英明 (広島大学) はじめ、八木浩司 (山形大学)、コアリングを担当した岡村真 (高知大学)、松岡裕美 (高知大学)、植物担当の三宅尚 (高知大学)、東北大学大学院生、山田智輝、東京大学学生、中村淳路、それに地球研から寺村裕史と長田が参加しました。

また、ネパール側からも、国立公園管理官のギャワリーさん、地質学者で信州大学への留学経験を持つアディカーリーさん、日本人のお母さんをもつ医者の方、マヤさん、コーディネーターのダワさん、それにポーター6名が参加されました。

ララ湖は標高3000mにあります。行く前には人がほとんどいないのではないかと想像していましたが、意に反して多くの人が行き交う場所でした。ネパール人の旅行者が多いのにはびっくりしました。海外からも旅行者は多く、イタリア人やカナダからの女性一行様、ドイツ人などに遭遇しました。ヘリコプターでララ湖に入った頃は、まだ雨季が明けず毎日雨でした。昼からは風も出て大変寒い中、コアリングは行われました。ちょうど中日あたりに雨季が明け、後半は天気にも恵まれ、4000m級の山にも登りましたし、近隣の村にも行きました。

キャンプ生活は探検部上がりの長田には想像すらできないものでした。ピザやスパゲティ、はてはケーキや寿司まで食卓に並ぶとは、思ってもいませんでした。あまりの食事の豪華さに、「粗食に耐える」をモットーとする長田はお腹をこわすほどでした。コアリングがうまくいったことに加え、独特の日本語 (マヤ方言?) を駆使して、一人目立っていたマヤ・ドクターの超ポジティブ・シンキングのおかげで、楽しい調査となりました。後半



やせ細った馬



スルケット

は「帰りたくない」を連発し鬮を買いましたが、この日記もその楽しさの一部が伝わればと、ここに掲載するしだいです。なお、この日記は原文をそのまま掲載するのではなく、編集が加えられています。日記を打ち込んでくださり、さらに編集の労を執ってくださった山田智輝さんに、名をあげて謝意を表したいと思います。

#### ■調査隊日記

※日記記入者は日付の後にカッコ付で記名

**9月3日** (八木)：カトマンドゥからネパールガンジへ  
朝 7:00 朝食。Sunset View の和朝食は、体調を整正するにはもってこい。昼メシがいつ食べられるかわからないので、ハラ一杯食べる。

7:30 荷物をまとめてロビーへ。二次隊のバンザイ三唱をうけて出発。

空港では駐車場からポーターさんたちに荷物をもぎとられ、一人 50 ルピー払わされる。コーディネーターの K.C. さんが後から来る。現地ガイドを取り仕切るダワさんは少し遅れて、キャンバスバッグを運んで来る。5 人分の荷物は 90kg。エクセスなし。

8:35 頃 搭乗待機室に Yeti Airline のバスが来て、Call アリ。BAeJetstream は Twinotter より大きめ。30 名近く乗れる。満員。

9:00 離陸。4500m 程度でマナスル山塊見える。6000m まで上昇して、より明瞭になる。後方にランタンが雲上に顔を出す。しかし、アンナプルナ、ダウラギリは雲に隠れている。西方に進むにつれ、天候悪化。ネパールガンジ空港着陸直前は、最悪となる。前日のインドのアーンドラ・プラデーシュ州首相遭難のニュース

が頭をよぎる。滑走路直前で Touch Down? と思うほどのギリギリの着陸に肝を冷やす。

ネパールガンジ空港ではドシャ降りの雨の歓迎をうける。バンダ (ストライキ) で雨の中を人力車で移動かと心配するが、K.C. 氏が宿に車を手配してくれなんとかなる。しかしカトマンドゥで「Water Proof」と説明されて購入したバッグは完全に Water Free で、松岡さんは少々怒っていた。今日はスルケットへ行くはずだったが、バンダのおかげでネパールガンジの Traveller's Village というホテルに宿泊することになる。

10:30 というとんでもなく早い時間に沈殿決定なので、宿も空いていなく、お昼まで食堂で暇をつぶす。部屋に移って昼食。ヌードルスープはダメだった。

2:30 から、雨もあがったので、ネパールガンジ観光へ出掛ける。トリブバアン像を大阪の食いだおれ像のようだという声があがる。Surely! 確かにそうだ。旧市街南のヒンドゥー寺院まで行って U ターン。

新しい広い道で馬車をひろって帰る (容赦なくムチ打たれるやせ細った馬を見て、少し心が痛む)。松岡さんが食べ残しのトウモロコシを与えるが、馬がはき出したので、皆がっかり。火を通したトウモロコシは口に合わないのだろう。

6:30 からタメシ。明日はバンダもないので 7:00 朝食、7:30 出発!

雨のネパールガンジは案外涼しい。

日中雨が降って薄暗いと、ホテルのシャワーは冷水のみ。夕方晴れ間が出て温水がでるようになった。

**9月4日** (岡村)：ネパールガンジからスルケットへ

7:00 朝食 (Mr.K.C. を除き American Breakfast)。

7:30 スルケット向け出発 (Toyota HiAce Long



調査機材の積み卸し



ストライキの様子

Body、14人乗り)。ディーゼルエンジンとおぼしき音。昨日の大雨により、処々に泥濘あるも、Metal Road（穴ボコ少し）にて快走。Highway Crossingにて検問（停車中にヤシ殻付コブラ求む。3ルピー。ナイフで削るも固く、ボソボソとした味。甘みなし。ケーキトッピングのココナッツの「生」と気付く。

平野部は米作地（すでに刈り取り後）、水田は小さく（ $1\alpha$ 平均）、相続制度を知りたい。山麓に近く、ゆるやかな起伏、well-rounded Gravelを売る店道端にあり。

8:50 丘陵部に入る。サラの木（八木談）の森続く。5月には白い花が樹冠に咲き、一週間でしばむソウダ。諸行無常とはこのことを言うのと八木談話。平野から+500mで北の傾斜した砂泥互層（礫層ではない）に団結度から新第三紀層的ではあるが、early Pleisto.の可能性もあり、年代決定はどのような化石でやるのか？難しそう。砂岩表面にはキラキラと白雲母片（ソースの片岩起源）が多く、砂岩が剥離性をもつのはこのためか？

10:00 山中に入る。所々泥濘あり。最近崩落した斜面処々にあり。車一車線分、土砂排除。ほぼ垂直に地層もあり、thrustの近くか？歩けば地表情報の理解は難しくなさそう。

10:30 川を渡る。東南アジアの国の橋としては非常に立派（ケタも太い、戦軍用の北海道を思い出す）。茶店はバス。

11:00前 スルケット着。ホテルとは思えぬ、4階建て（2nd floorに八木、松岡、岡村、1st floorに山田氏入室）。八木さん空港まで登場予定のヘリの状況を偵察。ヘリ会社は何の連絡も受けていないとのこと。スルケット空港にあるヘリ、全4機中2機が衝突破損した後、2機体制で、食糧輸送がタイトだと「負」の情報入る。前空さんから、植物検疫のための書類、カトマンドウの

Hotel Sunsetに届いたとのデング。

14:30 Hotel Teestaにてダルバート、タルカリ昼食（今後省略）。洗濯のあと、シャワー。ぬるめの水、快適。スルケットの市街地は斜面にあり、ネパールガンジ（東京）に対する軽井沢か。昼すぎ30℃あるも、湿度低く、室内Fanで快適。

道端のカートには、リンゴ>バナナ>ザクロ>青ミカン（「>」は量の差を表す）、いずこのカートも同じものだけ。インド側から来るらしい。いつもサラダが付いてくるスタチ=カラマンシ=シークワサーが大型の酢ダチに変化した。

17:00 カトマンドウ本隊から、ヘリ会社へ手つけを払ったとのレンラクあり。カーゴトラックは今夜中にスルケット着のレンラクあり。すべて順調かつ周到。

19:00 ダルバート・タルカリ（いつもの）。うまい。高知の食事より、スパイシーでない。辛味欲しい。

20:30 雷、やや強い雨。明朝までは止むように祈る。明日6:30朝食、7:00空港へスタート予定。ウインチ台座の木材打ち合わせ。請安息把。

**9月5日（松岡）：スルケット 調査用機材到着**

朝5:00前に「アッラ〜」の声でたたき起こされる。ネパールではイスラム教徒は4.3%（地球の歩き方によれば）にすぎないが、その4.3%がホテルのウラにあるらしい。天気はくもり。なんとなくもやがかかっているが、晴れそう。

朝食はチャーと揚げパンみたいなフワフワしたもの。ネパールのひとはごはんはたくさん食べるようだが、朝はこんなもので足りるのだろうか。チャーはいつでもどこでもおいしい。

7:30にホテルを出て空港へ。ホテルのオーナーの車



だというマレーシア製のフィットがビッツ(ヴィッツ?)かという小型車に運転手+5人の6人でギュウギュウ。新車のニオイのする車だが、このような道路ではあつという間にボロボロでしょう。

空港に到着するとすでにトラックが待っていた。ナイスタイミング。さて、この大荷物をどうやって降ろすものかと心配していたが、K.C.さんがあーだこーだ指示して、なんだかんだで一時間ちょっとで終了。自分で何も運ばなくてもいいって、海外はホントに楽。7月13日に高知を出て、マラッカ海峡を通過、インドを抜けてここまでやってきた荷物は(船外機のラックがこわれたことを除けば)ほぼ元気でした。いやーすごい。しかも予定どおりだ。

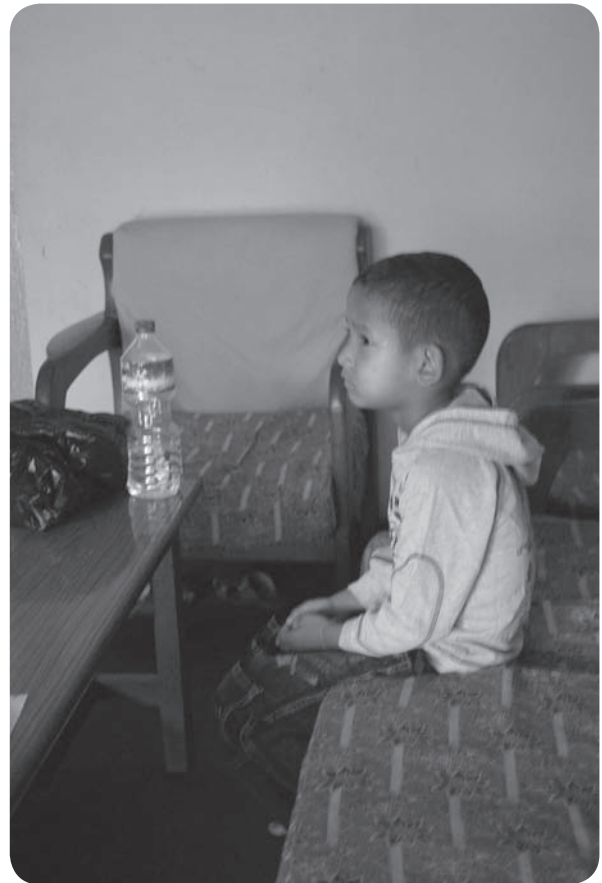
その後エンジン(発電機)チェックを行う予定も、ガソリンが必要なことからキャンセルされ、あとはバッテリーを充電してもらっただけ。ホテルに帰って車屋さんへと向かったが、今日は土曜で店は休み。結局町をぐるっと一周してホテルへ戻る。途中から雨。八木さんはリンゴ、岡村さんはザクロを買ってくる。リンゴは見た目はとても食べられそうにないが、むいたらけっこう美味。ザクロも一見すっばそうだが、なかなかおいしい。タネのないザクロを誰か品種改良して下さい。

午後は晴れてヘリが荷物を運んでいる。がんばって仕事をかたづけてほしい。といってもいまのところばっちり順調なので、数日待ってもOKですが。

今日も午後はウダウダです。ララ湖へ行ったら大変だろうなあと思いつつ、やっぱりウダウダ。土曜日でも店は半分以上openしている。街中は散歩なのかショッピングなのかよくわからないが、とにかく歩いている人がたくさんいる。

赤い旗(?)をかかげたジープが何かわめきながら走り回っている。マオイストか?その後夕方になってたいまつを手にしたデモ隊が街中をねりあるいていた。30人程度だが、何を主張しているのかは不明。

昨日ネパールガンジの街でもデモ隊に出会っており、おとなしい感じのネパールの人も、やる時はやるんですね。夕食は昼食と同じくダルバートタルカリ。毎食同じような、違うような、よくわからないが、まあおいしい。今夜はほぼ満月らしい。つきなみだが月がとっても美しい。街中は暗くなっても散歩する人が多く、なんとなくザワザワしている。車が少ないと人の動きを感じることができる。



スルケットのホテルの子供

#### 9月6日(山田):スルケット 後発隊合流

今朝、昨日と同様に爆音コーランで目が覚める。しかし昨日とは異なり、起こされた直後に再び就寝。だいぶ図太くなってきた。

本日は朝に予定が無いため、いつもより遅い8:00に朝食。昨日の反省を生かし、チャパティ(名称は不正確かも)と豆のカレーと一緒にいただく。豆のカレーは若干塩辛かったものの、おいしかった。チャーは今日もうまい。

9:00に作業用のバッテリーを充電するために街に繰り出そうということになった。ロビーで待っていたが、皆さんは一向に下りてこない。ホテル従業員の写真を撮る。ネパールの方は、中には恥ずかしがる人もいるが、概ね好意的に写真を撮らせてくれる。子供番組に見入っている男の子がとても愛らしい。

バッテリーの充電はホテルの従業員がやってくれることになったので、一同でホテル周辺を散策。雨はほぼ止んだ。ホテルの窓から見えるバザールへ。このバザールは貴金属アクセサリーを扱っているようだ。職人さんがその場で製作している。指輪の値段を尋ねると、2000ルピーとのこと。高い!しかし日本円にすると2000円

強。ものの出来を考慮すると、決して高くはない。金銭感覚がネパール用のそれになっているようだ。周囲を一周し、各自少々買い物をしてホテルへ。また雨が降り出した。

12:00 頃、一同で集まり談笑。岡村先生にヒモの結び方を教わる。また、岡村先生が先程市場で購入した米粉で団子を試作された。ゆでて食してみたところ、なかなかいける。しかし粉は米粉ではなく、小麦粉だったようだ。薄くのばしてやいたらナンになりそうだ。

昼食は八木先生の提案で、チャウチャウ（インスタントラーメン）をホテルで出してもらうことになった。具はカリフラワー、タマゴ、トマト、インゲン豆など。何味なのかはよくわからなかったが、とてもうまかった。

4:00 頃、後発隊が到着。中村さんが自分の部屋に来ることとなったため、荷物を整理。3F で少し談笑してから、30 分ほど市内を散策。

7:00 後発隊が泊まることになる Namaste Hotel で夕食。今回の参加者が一同に介する。メニューはガルバートタルカリ。八木先生から、過去に仲間の遺体を冬山で回収した話を聞く。

8:30 頃にホテルへ帰る。路地裏には蛍が飛んでいる。蛍を見たのはいつの日以来だろうか。空には星も一つ見えている。明日、無事にララ湖に到着できることを切に願う。

### 9月7日（前奎）：スルケットからララ湖へ

昨晚から降っていた雨がやんだと思って安心して寝ていたら、4:00 頃から断続的に強い雨が降り始める。一応 5:00 に起き、シャワーを浴び、6:00 に向こうのホテルに朝食を食べに行く。

朝食が出てきたのは 7:00 頃だったがオムレツとトースト、ティーの充実した朝食だった。北側の山稜が見えていたのでいけると思ったが、朝食を食べているうちに見る見るうちに雲が湧いてきて隠れてしまう。今日は 60% だめかもしれない。

11:40 突然空港へ行くよう連絡が入る。荷物をまとめて、ハイエースで全員が空港に行く。空港で荷物をセキュリティチェック後、計量すると 200kg オーバーしているらしい。八木さんと長田さんが残るということで決着した。しかしダワさんたちが Shree エアと交渉し、なんとか一人だけ残ることで決まった。ダワが次の日のフライトで来ることでスルケットに残った。

13:10 Ms-17 に乗り込み take off。途中雲の中を通



ララ湖に着陸

りながら、また山の低い所を越えながら谷沿いにララへと向かう。ヘリは 3000m くらいの高度で侵入していく。

14:10 ララに到着！！雨が降っているがなんとか荷物を降ろして、ヘリが帰っていった。犬多数。軍人が荷降ろしを手伝ってくれた。

15:00 ちょっと遅いランチ。ララヌードル、パンケーキ（フライ）、サラダ、魚の缶詰、フライドポテト。みなおいしいといって腹いっぱい食べていた。

16:00 荷物（コアリング器機）の様子を見に行き取られないように整理した。軍の指令官にあいさつに行った。このコマンドーがすごい人でエベレストのサミッターで、オリンピックの聖火の責任者だったり、プラチャダ首相の SP やってたりと、すばらしい人。人格もよくて、我々の手助けをしてくれると約束してくれた。

19:00 夕食。ネパール料理とカラアゲ、酢のものといへんおいしい。食事の前に血圧を計ると、皆高めだった。(135、103) と自分も高めだった。血圧ネタがかなり盛り上がる。

20:10 外に出ると、少し月明かりが見えた。音がほとんどしない静寂の世界。時々軍から時報の鐘が聞こえる。

明日は晴れてほしい！！

### 9月8日（寺村）：ララ湖 コアリング機材組み立て

6:30 朝のチャーを各テントに持ってきてくれる。その後はテント内でごろごろ、時間をつぶす。

7:30 朝食。まずおかゆが出た後に、パンケーキ、ゆで卵、サラダ。おかゆにふりかけをかけて食べたら、それだけでも十分にお腹いっぱいになりそう。

8:30 高知大チーム（岡村・松岡両先生）+山田、中村、



コアリング機材の組み立て



シェルパのクンガ氏

寺村が、コアリング装置を組み立てに出発。

- ・ボート 4 台に空気入れ。1 台にエンジン取り付け。
- ・ポールを三角形に組んだボート 3 台の上にボルトで固定し、その上に三角形の板を 3 枚置き、足場の完成。

10:00 お茶休けい。

10:15 組み立て再開。足場の上に三脚ポール？を立て、中心にウインチ（小）をつるす。発電機をボートにのせエンジンがかかることを確認して、お昼ご飯に。

12:00 昼食。スープ（ララヌードル）、ローティ、野菜炒め、じゃがいも、ソーセージ、お茶。

13:30 組み立て再々開。木の棒にボルト用の穴を開け、ウインチ（大）を固定。ウインチにワイヤーを巻き付けていくが、この作業が大変。最後の方は軍の指令官、副指令官まで手伝ってくれた。感謝です。

15:30 頃 とりあえず、ひと通り装置がほぼ組み上がったところで、手伝ってくれたお礼も兼ねて、指令官と副指令官を、ララ湖クルーズに招待。結構長い時間案内していた。

16:30 頃 ひと足早く、山田さんと一緒にキャンプに帰り、シェルパの人に、お茶を組み立て現場に持って行ってもらおうよう頼む。湖の周囲を歩かれていた長田先生と前空先生がキャンプに帰って来られ、様子についてお話を聞く。

17:00 すぎ エンジン付きのボートに引っぱられ、組み上がった 3 台のボート + やぐらがキャンプのすぐそばまで帰航。

19:00 夕食。スープ、ご飯、うりみみたいな野菜、鶏肉、ブロックのソーセージ。

20:00 消灯。

感想：コアリング装置の組み立てが無事完了し、ほっと一安心。いろんな人が協力してくれたのがうれしい。皆

さんに感謝。ずっと腰まで水につかりながら作業をなさっていた岡村先生、松岡先生や中村くんをはじめ、調査隊の皆様もとうもお疲れさまでした。…と書くと調査が終了したような感じになってしまうが、コアリングは、明日からが本番。ゆっくり休んで疲れをとりましょう。

でも、どうせ、夜中に何度か目が覚めて、トイレに行きたくなるんだろうな…。

9月9日（長田）：ララ湖一周

5:50 起床。テントを出ると、雨は降っておらず、今日は晴れるのではないかと期待をもたせる。東の空の太陽が昇る方がかなりはれ、徐々に氷河をいただく山が顔を出す。

6:20 今日は長い夜を待ちかねた老人組が早々と起きはじめたこともあり、若干早めにお茶をくばりだす。

7:20 朝食。おかゆとトーストそして卵焼き。朝食の前にはいつものように Maya ドクターによる血圧チェックがおこなわれる。山田さんと八木さんがよくないとされたが、前から高いと言われていた三宅さんと長田は大分正常値に近いとのこと。そこで三宅、長田、寺村の三人はララ湖一周し、それを GPS におとすこととする。岡村さんをチーフとするコア採取隊は午前中は水深を計り、午後からコアを採取することにする。

8:30 岡村隊始動。

9:30 三宅、寺村、長田の三人とポーターの四人でキャンプを出発。

10:30 シバ寺と言われる場所に到着。それまでも植物をみたり、湖の魚をみたりしないが、ゆっくりと着く。そこでお茶を飲み休憩。途中援助米を頭にささえて運ぶネパール人に会う。タルチャから歩いてきたという。

11:30 ララ湖のキャンプから見える草地に到着。こ

ちからみえているよりも水が多く歩きづらい。放牧中の牛、水牛にまじって馬もいた。昼食には早いのもう少し進むことにする。

12:00 やっと草地をぬける。ポーターにいろいろ聞くと、彼の日給は 500 ルピーで、エベレストのふもとに住んでいるシェルパだそうです。今回のポーターは彼と dawa さんだけがシェルパ人であとは Damang、Newar、Sunil と混成部隊と知る。マオイストへの思いもいろいろと語っていたが、これは割愛します。これほど Hindi をしゃべれるとは思わなかった。

12:30 森林地帯のきれたところで昼食。チャパティ 2 枚とチーズ、ハム、ゆで卵と豪華。チャイと一緒にいただく。ここからはララ湖キャンプにつくことを優先させ、スピードをあげる。

13:00 本部前壱さんと交信後歩きはじめる。歩きはじめてすぐタルチャへ行く道との分岐点に到着。このころから雨が降り始める。がけをけずったような道があったり、白砂の浜があったり。松に白浜とは日本みたいだと話をする。

14:00 コア隊がコアをとっているようすを八木さん前壱さんの交信で知る。この辺から足が重く、ただひたすら歩く。

15:30 ようやく、軍のところにつく。ここで急速に足どりが重くなる。ちょうどコアをとって戻る船がみえたと思ったら、八木さんから交信が入る。ダワさんが無事ついたかどうかきかれるが、こちらも知らないと答える。

16:00 ようやくキャンプに帰ってお茶を飲む。ちょうど岡村さんたちも帰ってきたので握手する。われわれの歩いた距離は 25km だと GPS から知る。よくあるいたものだ。

16:30 疲れたので寝る。しばらくすると大きな爆音がひびく。あとで聞くと、マオイスト時代にしかけた地雷を水牛がふんだのだという。

19:00 夕食。おかゆにスパゲティ、モモ、野菜。どうも歩き疲れたせいかあまり食べられず。ネパールにはじめてきたのは 1978 年。ダーズリンから国境を越えタイ平野をえんえんと走り、途中一泊して、30 時間ほどかかった。そのころネパールはインドルピーとヒンディーが蔓延し、インドの属国のような印象だったが、今はマオイストの内戦を経て、ネパール人の国という国民国家意識が確実に定着したかのようにみえた。ただエスノナショナリズムをマオイストがあおったために、内



ガイドのバヌー氏

部分裂もひどくなったとシェルパが語ってくれたのが印象的だった。

**9月10日(中村):ララ湖 コアリング**

6:30 朝のチャーで起床。

7:30 朝食。ミルクティーにジンジャーを入れるのがはやり。

コアリングに出発。今日のメンバーも昨日と同じく、岡村先生、松岡先生、山田さん、バヌー、私。力持ちの Bhanu は毎日大活躍だ。キッチンテントでバヌーと話をした。家族はジュムラに住んでいると言う。おくさんは看護師で、娘さんがいるそうだ。ネパールでは学費が高く、月 2000 ルピーの学校代の工面がたいへんだと話してくれた。東京で一人暮らしをしていると言うと、家族がばらばらに住むのは不思議だと言っていた。

今日は 2 本のコアがとれた。rara09-2 は 5.5m ぐらい。rara09-3 は 6m ぐらい。

12:30 昼食。13:30 まで休憩。

13:30 コアをばらし、端に封をした。

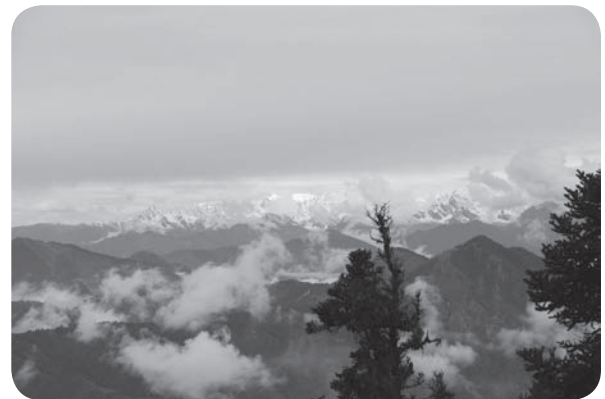
15:00 rara09-1 をあける。上部に約 10cm の砂層がある他はグレーのシルト。年縞はなし。



ムルマ村の住人



ムルマ村遠景



中国国境遠望

17:30 今日の夕食はヤギをつぶしてソーセージとヤギカレー。ヤギは 8500 ルピー。切った頭を持って記念撮影。

ソーセージとカレーはとてもおいしかった。でも調理風景を思い出すと少し気持ちわるい。夕食は、イタリアから来た夫婦、軍の隊長さんなどとパーティーだった。

外に出ると星空がきれい。星座がわからないぐらい星がたくさん見えた。

#### 9月11日（三宅）：ララ湖 植生調査

5:50 起床。満天の星空から一夜明けて、今日はララ湖に来て最もすがすがしい青空を見ることができた。シスネ山やチーマータレクの山容を見ながらのティータイム。

7:40 朝食。おかゆの後、チャパティにハム、サラダ、ゆでたまご。おかゆだけ腹一杯、一度食べてみたいものだ。

9:00 八木先生を隊長として、長田先生、寺村さん、山田さんたちと 3700m のピークを目標に登山。

9:20 登り始めてすぐに丘の上の寺に到着。屋根に竜と羊の彫刻あり。竜は水、羊は自然の神。Picea

smithiana の木の根元には自然石を利用したご神体あり。ララ湖が眼下に広がる。

10:07 3290ma.s.l. で休けい。ララ湖がきれい。

10:18 ムルマ村が見える。小じんまりとした集落。

11:00 3490ma.s.l. で 2 度目の休けい。この標高より少し低いところから *Abies spectabilis* が出現を始める。ただし、南側斜面の急峻は斜面では *Quercus semecarpifolia* が優位。北側斜面に *A. spectabilis* のりっぱな林が広がる。*Betula utilis* も混生。ここまで来てよかった。ここの植生の regional settlements がなんとなく見えてきた。6000~7000m 級の山塊が北面に広がる場所で記念撮影。あの風景は一生忘れないと思う。中国との国境が広がる。

11:50 ムルマ村に到着。マツの葉でふいた屋根の下には薪がたくさん積まれていた。大麦、小麦の畑、タバコの畑などが広がる。集落は標高に沿って一直線、畑は斜面をうまく利用して作っている。まるで四国の祖谷に広がる景観にそっくり。子供たちがかわいい。人なつこい。はずかしがり屋さんもいる。うちの子供を思い出した。

13:00 テントサイトに無事到着。ただし、寺村さん



現地住民を診療する Dr. マヤ



鏡のようなララ湖

の右ひざ痛が心配。

13:30 遅い昼食。(美保) ヌードルに、揚げパン、スパイシーなジャガイモ、ウインナー、大根サラダ、チーズなど。

14:20 岡村先生たちは測深に出発。少し休んでララ湖東側の溪谷に出発。途中で冷たい雨が降り出す。溪谷林の種組成を記載。雨が強いのでテントサイトに戻る。

16:20 テントサイトに到着。測深部隊は未だ帰着せず。少し心配。

17:00 測深部隊無事帰着。お疲れさま。

18:20 ダワさん、ララ湖に無事到着。

18:30 お湯割りウイスキーを手にダベる。

19:10 夕食。シチュー風のとろみつきヤギカレー。おいしい。

## 9月12日(八木)：ララ湖 湖底地形測量

9月3日に出発して、9名のメンバーの日記が一巡した。

もう我々の調査行も10日目に入ったのだ。

昨晩はほとんど雨が降っていたように思われたが、6:00頃はなんとかやんでいた。昨日午後の寒さに較べるとなま温い。時折やってくる雨幕も雨のうちには入らない。むしろ今日午前中は風もなく、おだやかな天候だった。朝メシは、水分多めのオカユで三宅さん差し入れのお茶漬けノリが、よくあっておいしかった。

メンバーの行動は、八木・前空・岡村・松岡が測量船によるプロファイリング、山田・寺村はマヤドクターの診察に同行して近隣のムルマ村ヘルスポストへ。三宅さんはさらに下流側の植物調査、長田、中村はBCで文筆活動等にいそむ。

我々測量船部隊は、風のないベタナギのララ湖をゴム

ボートで快走。シバ神廟での休憩などを経て作業を終了す。12:35 帰投。まさに Mission Completed で爽快。昼食には大根入りミソ汁とジャポニカライスで皆さん満足がと思ったが、日本食経験のない Gyawali さんが、ネパールご飯を別メニューでもらっていた。少し気配りが足らなかった。

午後からは八木、前空兩名は測量データから湖底地形の概略を計算して作成する。165mより深い部分が湖西側に存在することがわかる。明日は中央・東部の水深160m付近で再びコアリングの予定。

3時半頃から約30分間強く雨が降る。この雨でメンバーの皆さんが帰ってくる。しかし、マヤドクターは村人からの強い要請で診療活動に大忙し。夜7時まで帰ってこなかった。

ララ湖からの outlet から下流側には深いU字谷が刻まれているが、その上の空はほとんど雲がつかない。その上方に雲が出ててもその高度は3500mぐらいで、そこを通過してヘリやツインオッターがララ湖から東へ抜けていく。多少雨が降っていても空の回廊が開いていることは、我々の撤退路が確保されていることを意味するので心強い。

夕食前から、八木・前空が一杯やり始め、夕食前には多くのメンバーが集まりもりあがる。あと六日間順調に作業が進むことを期待する。

夕食後テントを出ると満天の星空に皆さん魅了される。明日のお天気を期待してしまう。

☆夕食はスープ、ピザ、ナポリタン、ポテトとイタリアンであった。

☆朝の血圧測定では、測定前に降圧剤を服用するという八木のドーピング問題が発覚。マヤドクターにしかられる。



コアリングの様子



コアリングの様子

**9月13日 (岡村) : ララ湖 コアリング最終日**

6:00 起床。体調が良くなったのか？夜中に1回トイレに行っただけ。東の空と山が Margemröte 状態へ。一瞬遠くの峰が黄金に輝く。美しい。神々しい。湖は全くの無風、久しぶりの快晴が期待される。最後のコアリング2本に備えて4kwの発電機に半分ほどガソリンを追加。皆も起きて来た。八木さん、前空さんは3時から悶々としていたらしい。

7:00 朝食。ダルスープ塩味。おかゆにチーズを願ったらキザんだものが出て来た(何をするのかお見通しのよう)。おかゆにキザみチーズをのせ、しょう油を二、三滴たらず。うまい。キャンプ中で一番の味。Dr. マヤも同調。おいしいと言ってくれた。八木さんに一口すめたが、リゾートのようだった。主菜は温サラダ、あげパン、いんげん豆。限られた食材で、工夫がすごい。冷蔵庫の余りもので最大の味を考える楽しみに似ている。

7:30 出港準備。船外機と予備ガソリンを積み込む。

8:15 出港。快晴無風。湖面は鏡。

コアリングラフトに松岡、山田、中村、屈強ネパール人の4名。モーターボートに岡村、マヤさん、長田先生でラフトを引く。途中軍のキャンプに寄り、コマンダー参入。奥様が軽い高山病とかで、マヤさんが往診に向かう。コマンダー上機嫌で写真を撮りまくる。

9:15 St.5 コア投入。

9:45 St.5 コア掲収。フルにとれた。黄テープは少しでは、3人同時にカッターが出ており、笑。次に何をすべきか、4人が完全にマスター。

10:30 St.6 (水深60m予定)へ出発。水深が安定せず。50mの段丘状地形上でコア投入。前空発案ポイ

ント(浅い方が堆積速度が遅い?)。私は粗粒になるのではと思ったが、Tryするのも良いか。浅いので、最低速で降下させる。透明度が高く、コアラー本体、テンビン、パイロットすべてが船上から見える。こわいくらい。吸いこまれそう(キャンプ地の脇にある東屋でこの文章を書いているが、西側に鬼グルミとアーモンドの木があり、実がなっている。クルミは未だ熟してはいないが美味、アーモンドは苦扁桃様で杏仁豆腐の味がする)。

10:40 コアラー着底。引きぬきに最大荷重。発電機ウナリをあげる。イカダが反力で沈む。ぬけた瞬間プラットフォームがとび上がる。(手応えあり)。

11:00 掲収完了。c/cは明色の泥。氷河泥 glacier milkを期待。意気揚々と引き上げる。ヒマラヤの雪峰を背に皆で記念撮影。司令も満足顔。

12:00 強い風吹き始め、波頭が白くくだける。向かい風で船側2kt。司令を降ろし、キャンプ場、繫留地へ向かう。

12:30 Anchoring。ようやく終わった。責任を果たした安堵感に酔う。これでヒマラヤ南麓のスタンダードは作成可能。ここまでの仕事にchallengeされた長田先生に礼を言う。勇気に感謝。

12:45 昼ごはん。スパゲティスープ+こしょう。パンケーキとハチミツ。ドゥドゥチャ。朝のチーズ茶づけが口に残る。明日も所望しよう。ベンチで5分間寝る。2回落下する。ダワさんがもう一度落ちるマネをせよとせまる。しかたなく(好意を無にするものではないので)やる。日本人が教えたのか？ネパールでもやるのか聞きそびれた。

13:30 風強く、白波たち始め、いかだをラッシングし直す。コア切断開始(松岡+中村と寺村)。皆良く動いてくれる。すべてがなごやかに、楽しく、時間が過ぎる。



コアリングの様子



コアリングの様子



コアリングの様子

顔に大ヤケドをした女の子が父親に連れられて来た。泣きもしない。マヤさん二時に 100 人以上の患者が下の Medical Post に来るそうだが、手当を丁寧に行っている。女の子がかわいそうで見られない。松岡さんが 3rd stage の火傷と言い、日本では 3 度という。同じだとのたまう。

15:00 八木・前空帰キャンプ。湖東側のバンクは Terminal Morain だと語る。構成岩石は Amphibolite があると。深成岩（花崗岩）この付近（主に低変成度の schist から成る）にはないので、迷子石系だろう。モレーンだとするとどこから来たのか。ドテの東側は急斜面になり、モレーンから水がもれ出ているとのこと。大地震でもあれば、大水害となり、下流側は山津波に消されることとなるのだろうか。

16:30 ドウドウチャをのみながらゆったりとした時が流れる。皆仕事成功裏に終わり、和やか。満足感を味わっている様。司令一家の訪問を受ける。

17:00 寒くなり、集会テントに入る。ネパールラムをお湯割りにする。体が温まり、筋肉が弛緩するのがわかる。

のり巻きが出た。おかわりする人多し。

19:30 食事も終盤。八木さんがナツメロを歌い始める。歌詞があやふやな所はスキップでごまかす。次第に高歌放声状態に入る。「のめく」と言う状態。ロシア国歌、中国国歌まで（インド国歌も 2 小節）出る。

20:45 歌いながら、テントに引きあげる。長田さんはテントの中でも歌い続ける。明日朝起きて来られるのだろうか？皆で星空をながめる。

23:30 寒い。フクロウ（アオバツクか？）が鳴く。おやすみなさい。あすも良い日でありますように。

**9月14日（松岡）：ララ湖 コアリング機材解体**

5:30 に起床。昨日は晴れだったが、今日はやや雲が多い。それでも大きくはくずれないだろう。熱いドドチャと洗面用のお湯が、何もしなくても出てくる生活はすばらしい。

朝食はおかゆ、パンケーキ、ダイコンのサラダ、ゆでたまご。八木さん、前空さん、アディカリ先生は対岸の調査へ出発（ボートで送ってもらった）。コアリング班は「いかだ」の解体作業。バヌーさんをはじめとした強力シェルパ隊の強力により、あっという間にバラバラ。まったく海外では仕事がラクです。天気はいいが、ポー





ギャワリ氏



軍の司令官

トの底板は乾燥してくれない。昼前にはアーミー御一行の遊覧航海を行う。引き船とボート一台でララ湖を進む姿はなんとなくおまぬけ。12 時頃から風が強くなった。昨日も同じなので、このパターンがつづくのだろうか。

昼食はスープ、あげパン、ジャガイモのカレーいため、サラダ、ランチョンミート。キャンプサイトに新しくドイツ人のパーティと平和を願うインド人が加わる。あっという間にインターナショナル。

午後は八木隊も帰ってきて、シャワーしたり、コーヒー飲んだりゆっくり過ごす。雨がパラつくが、せんたくものをとりこむほどでもない。今回もヒマ。この 10 日間ほどでほぼ仕事が終わったということで、何というか、あっという間だった。

夕方から雷雨となる。2 日間も晴れていたのは始めてだが、これだけ激しい雨も始めて。

夕食はみそスープ、パスタ、きのこいため、なすいため、ソーセージ。明日の頂上アタックと荷物の重量制限の話をして、今日は早めにおひらぎとなる。今夜は星は見えない。明日はよい天気になりますように。

そうそう、夕方湖の東側に向かったマヤ先生、山田さん、中村君の 3 名は大雨の中暗くなってから帰ってきた。

マヤ先生はカゼを引いたもよう。お大事に。

#### 9月15日(山田):ララ湖 登山

6:00 ティーサービス。今日は一部隊員がキャンプサイト向かいの山に挑むということで、いつもより 30 分早い。朝食を済ませ、7:15 にボートにて対岸を目指す。

7:50 対岸に到着。アタック開始。メンバーは長田、八木、前空、アディカリ、三宅、中村、山田及びクンガ、ガネーシュのシェルパ 2 名の計 9 名(敬称略)。ボート移動時は若干雨に降られたがものの、アタック開始からは雨、風ともに無く、状況は非常に良い。約 1 時間おきに休憩をとりつつ、一同山頂を目指す。

3500m を越えたあたりから、明らかに酸素が薄くなる。3700m を通過すると、非常にきつくなる。心臓が脈打つ音が聞こえる。しかし 3800m まで到ると体が環境に順応しはじめた。頂上が見えるとあとはモチベーションで一気に進行することができた。頂上付近はガレ場が続き、さらに道が狭いため、なかなかスリリングだった。なお長田プロジェクトリーダーは 3800m 付近にて脱落。一応富士山超えを果たされた。

11:55 山頂に到達。雲もなく、周囲はまさに絶景。

山頂付近から見下ろすララ湖はとても美しい。ここで一同昼食をとる。標高は4030m。横になり、くつろいでから下山開始。体力的にはそれほどでもないが、足腰にかかる負担は下山の方がやはり大きい。約2時間後、15:15に岡村・松岡のボートと合流。一同無事帰還。

キャンプに戻ると、我々のキャンプの横にオレンジ色のテント群が。カナダからやって来た女性だけのグループらしい。13名の旅行者に40名の現地スタッフが帯同しているとのこと。しかもすべて女性。

17:30 前空隊長がビールを調達してきて下さった。久々に飲むビールは腹にしみる。うまい。夕食をとり、2000頃に解散。

テントに入ると、隣のカナダ隊方面から何やら歌声が聞こえる。ビデオ片手に見学へ。現地の女性たちが輪になって、フォークソングを歌っている。カナダ人女性たちのうちの2人がテレビカメラと集音マイクでその様子を記録している。暫く見物した後、雨が降ってきたのでテントに戻る。なおこの様子はビデオの暗視モードにて撮影。

#### 9月16日(前空): ララ湖 撤収準備

6:30 Bed Tea。晴。6:00の気温9.5°C。

昨晩も“イノシシ”と思われる動物の訪問を受ける。一度起きて見たが、姿は確認できなかった。ゴミ捨て場を漁っていたようだ。

8:20 湖底地形測深調査。昨日-171mを記録した地点を確認したが、器機調整の加減により-169mに変更。ララ湖の最深部は-169m(暫定)でほぼ決まり。昼食後一休みする。本日の昼食はネパリカナだった。マヤドクターの減塩指導により、やや味付が甘めであり、ちょっと不満であった。

13:30から、測量船と器具の最終撤収作業にかかる。サンプルその他、すべてヘリポートまで運んだ。その間、手伝ってくれた村の青年を、少し遊覧船で遊ばせてやる。15:30から夕立のような雨。風が強くなり、発電機のガス抜き運転の途中で中断し、テント場に戻る。ほぼ撤収終了。8日以降9日間活動してきたゴムボートも本日で営業終了。ご苦労様でした。

19:00から食事。チャーハン、パスタ、コロッケ、キャベツのサラダ。たいへんうまかったのでおかわりした。空は満天の星。明日は最後の日。ゆっくりとララ湖を楽しもう!!



下山完了

追記 この日の晩に、村の青年団の寄合のような会合が夜8:00頃から裏のゲストハウスで始まり、3:00頃まで歌と踊りでさわがしかった。夕方晴れ間がみえるのに大雨だった(きつねの嫁入り。ネパールではジャッカルの結婚)ためか、人間も男女の出会いがあったのではないかと想像した。

ネパールでは地方の人口が減り、カトマンズの人口が増えているらしいが、まだまだMuguのような辺境の地では子供の数、若者の数が多く、活気がある。

#### 9月17日(寺村): ララ湖 最終日前日

6:00 起床。最終日は明日だが早朝にヘリで飛ぶだけなので、実質は今日が最後。長田・山田・中村3氏は5:00起床で日の出を見に近く展望台へ行った模様。(結果は太陽のところだけ雲がかかって、見る事ができなかったらしい。)

6:30 お茶。洗顔のお湯。

7:30 朝食。パンケーキ・サラダ・チーズオムレツ・おかゆ。

調査も終盤でふりかけ等を使い切ってしまう、おかゆに味噌汁のもとやコーンスープのもとなどをふりかけがわりに使用。意外とおいしいようだ。

8:30 8時頃に、昨夜から隣のロッジに宿泊に来ていた小、中学生?のうちの7~8人がたいこを持ってキャンプに遊びに来る。昨晩は午前3:00頃までさわいでいたようで、調査隊の何人かはよく眠れなかったらしい。歌声とたいこの音がうるさくて、女の子達が歌いながら踊り出すと、みんなで写真撮影大会に。

8時半過ぎ、前空・八木・三宅・中村・寺村の5名がシェルパのガネーシュとムルマ・ピークを目指してキャンプを出発。出発早々展望台付近で寺村が脱落。キャン



キャンプ来訪者

ブに帰る。それほど体調が悪かった訳ではないが、少し登っただけで何となく頭がくらくらしたので、無理をしないでおこうと思った次第。他4名は予定通りムルマ・ピークを目指す。

9:30頃 キャンプに帰投す。10-15分ほど休んだ後、ドクターマヤ氏と山田氏とバヌー氏、クンガ氏の5人で、ホスピタルオフィスに向かう。

11:00頃 ドクターは診療所で診察。山田・寺村は部屋の中で休憩したり、付近を散歩したりして、時間をつぶす。

12:30頃 ようやく診療終了。普段医者が常駐していないので、ドクター・マヤは大活躍。忙しそうだが、患者のみんなに頼られているというのが良く分かる。すごいな。その後ドクターがムルマ村に行きたい、ということで、4人（マヤ氏、山田氏、クンガ氏、寺村）でムルマ村に向かう。途中で持ってきていたランチで昼食。

14:30頃？ 村に向かう途中で、午前にムルマ・ピークを目指して登頂に成功された前杵・八木・三宅の3氏と出会う。ちょうど村を通過して山から降りて来られたところ。中村氏はシェルパと二人で別行動らしい。休憩がてら3氏と話をしていたら、下から長田氏が登って

こられる。キャンプでずっとじっとしている事にあきられたのだろうか？結局5人になってムルマ村を目指すことに。

15:00すぎ 無事村に到着。小、中学校の校長さんに会い、1110ルピーを寄付。教室と生徒の数は多いのだが、教師が2人しかいない、とのこと。日本とは違い、ネパールの教育事情はかなり厳しそう。学びたくてもお金がない。あるいは勉強しても将来は嫁に行くだけ、という現実が…。

帰り際に「将来の夢は？」と聞いて、「14歳くらいになったらお嫁に行って子供を育てなきゃいけないから、特になりたい職種とかも無い」という10歳前後の女の子の気持ちを聞くと、なんとなく悲しくなる。しかし、ここではそれが「普通」なんだな…。

余っていたクッキーなどのお菓子をプレゼントするが、人数が多く、生徒さんひとりひとりには、ほんのひと欠けらずしか行きわたらない。それでも、みんな行儀よく並んで順番待ちをして、おいしそうに食べてくれた。十分な量がなくてごめんなさい。

16:00すぎ 帰途につく。が、道中でドクター・マヤ氏は次々に患者さんにつかまる。診察は無理でも、色々相談をもちかけられる。道端であろうと構わず相手するマヤ氏。大変そう。そんなこんなでキャンプに帰りついたのは結局18:00前頃。ところがおもわぬおまけ。ムルマ村の9歳くらいの女の子2人が、別れを惜しんで、キャンプまで一緒に来てくれる。ミルクティーと岡村先生作のおまんじゅうを食べて、お礼にかわいい歌をひろうしてくれた。名残おいしいが、19:00少し前にお父さんみたいは人と一緒に、村に帰って行った。山田氏に「来年も来てね！」と言い残して。

19:00すぎ 夕食。最後（になるはず）の晩さん。

食後にケーキが！！おいしかった。中村氏がネパールの伝統音楽の歌と踊りをひろうしてくれたのをきっかけに、スタッフみんなをまじえての、日・ネ歌合戦に。特に、ゲワリ氏の歌と踊りに、大いに盛り上がる。最後は和田アキ子の「あの鐘を成らすのはあなた」の大合唱でお開きに。

その後、外に出たら山火事？のようで、遠くの空が赤い。明日は6時起床、6時半朝食、7時半にはヘリポートへ行く予定。早いのでもう寝よう、と思ったが、この日記があるので、書いています。今はちょうど10時の鐘がなりました。

P.S. 夕食後に軍の司令官と副官さんの2人とその家族

がキャンプに来て、ネパール陸軍のマーク入りの帽子をプレゼントしてくださった。とても記念になります。それもひとり1個ずつ。ありがとうございました。

### 9月18日（中村）：ララ湖からスルケット村

6:00 起床。6:30 朝食。ララ湖最後の食事とてもおいしかった。

8:00 すぎ へり到着。ネパール帽子をかぶって軍の司令官家族とおわかれ。このネパール帽子、私がかぶってもファーストフード店員にしか見えないようだ。踊りのギャワリさんは今日は眼鏡で、もとの知的なイメージに変身していた。さすが帽子がよく似合う。

9:00 すぎ 離陸。回転しながらバックして、再び高度を下げたので、重量オーバーかと思ったが、いきなり前傾して急加速で発進した。

天気がよく遠く山がとてもきれいだった。

10:30 スルケット着。熱い。クンガさんを残してホテルへ向かう。昼食はネパール定食。

12:30 再び空港へ。トラックへ荷物を積み込む。炎天下での作業で皆バテ気味。

15:00 ホテルでビール！！うまい！！その後夕食までは自由時間。スルケットの町を散策した。

19:00 夕食。ネパール定食。毎日食べ放題なんて夢みたいだ。今日も山盛りにおかわりをした。夕食後、前空先生の部屋に集まり2次会。楽しい夜となった。帰る日が近くなって来たので皆さん感慨にひたっている様子。カトマンズでも有意義な時間を過ごしたい。

### 9月19日（三宅）：スルケットからカトマンドゥへ

7:00 起床。7:30 にドゥドゥチャ。

8:20 遅い朝食。トースト2枚にオムレツとドゥドゥチャ。オムレツの青とうがらしがきいていておいしかった。牛乳入りの濃厚ティーに皆で満悦。

9:20 中村さん、ダワさん、クンガさんと町中を散策。スカート、ハンカチなどを購入。中村さんはポスターを購入。

10:00 熱いシャワーを浴び、テレビのチャンネルをひねる。クリケットを見る。植物の同定をする。カトマンドゥにもどっても同定に時間がかかりそう。

12:00 スルケットを出発。車がよく快適な道中になりそう。Sal forestが続く。

13:40 昼食。行きと同じ場所でヒツジカレーを食す。魚の唐揚げも食べる。まずまずの味。

15:40 ネパールガンジに到着。蒸し暑い。空港で手続きをして飛行機を待つ。

17:45 予定時刻を30分ほど過ぎたものの、無事にネパールガンジを発つ。到着した飛行機が再びカトマンドゥへ飛びたつまで実に15分のみ。すばやかった。ヒマラヤの鋭峰は雲のため見えず。

19:00 カトマンドゥに到着。

19:30 Sunset View Hotelに無事到着。八木先生、長田先生ほかの出迎えをうける。とりあえず皆無事よかったです。

20:00 夕食。ビールが冷えていて実にうまかった。皆思い思いの料理に舌鼓をうつ。

21:30 散会。今日はゆっくり体を休めましょう。

P.S. ネパールの植物をじっくり観察する機会を与えて下さって、どうもありがとうございました。ゆっくりと植物のみをこんなに長い時間観察したのは、おそらくこの10年ほどありませんでした。日頃、些末なことに追われ、本質を見失う余裕のない生活をリセットする意味でも、大変ありがたい貴重な時間でした。このプロジェクトにおける私の研究、役割はむしろこれからですが、有意な結果を出せるように頑張りたいと思います。今後ともご指導の程、よろしく願います。



Shorea robusta (Sal) forest



ムルマの子供たち

## MoU 締結のお知らせ

インダスプロジェクトでは、今後のプロジェクトを進めるために以下の大学と MoU (研究協力に関する覚書) を新規、また再締結しましたのでお知らせします。

2009年11月1日にグジャラート州ヴァドーダラーに所在するマハーラジャ・サヤジラーオ大学 (Maharaja Sayajirao University of Baroda) と新規に締結し、同日ラージャスタン州ウダイプルに所在するラージャスタン・ヴィディアピート (Rajasthan Vidyapeeth) と再締結しました。

また、年度内にハリヤーナー州ローフタクに所在するマハーリシ・ダヤナンド大学 (Maharshi Dayanand University) とも締結する予定です。

今後の研究展開にご注目ください。

(遠藤 仁)

## 国際学会開催のお知らせ

この度インダスプロジェクトでは、ラージャスタン・ヴィディアピートおよびグジャラート州考古局 (Gujarat State Department of Archaeology) と共催してグジャラート州ブージュで1月28日～1月31日までの4日間の国際学会を開催することになりました。開催間際のご報告となってしまう申し訳ありません。日本からも多数のプロジェクトメンバーが参加する予定です。国際学会のタイトルと内容は下記のとおりです。

Bhuj Round Table 2010

Gujarat Harappans and Rural Chalcolithic Cultures

28th January

Inaugural

Chairperson: Prof. M.K. Dhavalikar, Former Director, Deccan College, Pune.

Chief guest: Prof. Kanti Gor, Former Vice Chancellor, Pt. Shyam Krishna Verma Kachchh University, Bhuj

Toshiki Osada: Introduction of Indus Project

First Session Chairperson: M. Tosi

D.P. Agrawal

The Harappan Studies: Points to Ponder

M.G. Thakkar

Neotectonic Evolution and Quaternary Episodes in Kachchh

M.K. Dhavalikar

Harappan Enterprise in Western India: new facets of an old Civilization

Rajesh Sashidharan

Distribution of Harappan and Regional Bronze Age folks in Gujarat

Second Session Chairperson: D.P. Agrawal

R.S. Bisht and Y.S. Rawat

The Harappans in Kachchh: In Retrospect and Prospects

J.S. Kharakwal, Y.S. Rawat and Toshiki Osada

Kanmer Excavation

Endo Hitoshi

Mature Harappan Lithic Assemblage at Farmana and Kanmer

Charu Smita

Lithic industry of Bagasara, Gujarat

29th January

First Session Chairperson: M.K. Dhavalikar

Pankaj Goyal and P.P. Joglekar

Animal Utilization Patterns at Kanmer, Gujarat

Anil Pokharia

Plant macro-remains from the Harappan settlement at Kanmer: A preliminary contemplation

M.D. Kajale

Palaeoethnobotany of Harappan sites in Western India with Special Reference to Gujarat: Visiting old problems with fresh approaches

Ambika Patel

Harappan Copper Artifacts from Bagasara, Gujarat: Cataloguing and Conservation

Second Session Chairperson: Asko Parpola

V.H. Sonawane

Anarta Culture: A regional Chalcolithic Tradition of North Gujarat

Prabodh Shivalkar

Padri and Anarta Culture: A Rethinking

V.S. Shinde

Harappan Culture in Saurashtra, Gujarat : A Regional Manifestation

Third session Chairperson V.S. Shinde

K. Krishnan

Micaceous Red Ware

Ajithprasad P

The Pre-Prabhas Pottery and the Early Chalcolithic Cultural Developments in North Gujarat

Katie E. Lindstrom

Building Up from our Foundations: An Integrative and Comparative Approach to Ceramic Classification and Analysis as Applied to Gola Dhoro (Bagasra), a Craft Manufacturing Locus of the Indus Civilization

Fourth Session Chairperson: V.H. Sonawane

K.K. Bhan

Review of Prehistoric Pottery from Gujarat

Akinori Usuegi

Ceramic styles in the pre-/Early Harappan period in India and Pakistan: a comparative study.

Randall Law

Harappan rock and mineral acquisition and use patterns in Gujarat

30th January

First Session Chairperson: Toshiki Osada

P.P. Joglekar and Pankaj Goyal

Animal Diversity at Harappan Sites in Gujarat

Takao Uno and Hirofumi Teramura

3D Images of Seals and seal impressions from Kanmer

Gregg M Jamison

Harappan Seals in Gujarat: A Comparative Analysis

Asko Parpola

Crocodile in the Indus Civilization and later South Asian tradition

Vivek Dangi and Manmohan Kumar

Pre-Harappans(so called Hakra Culture) of Upper Ghaggar

Basin

Second Session Chairperson :Y.S. Rawat

Dennys Frenez and Maurizio Tosi

The "Lothal Revisitation Project". A Multidisciplinary Research Program designed to reconsider the South-easternmost Hub of the Indus Civilization on the Arabian Sea.

Kuldeep K. Bhan

Harappan Trade and Organization of Specialized Crafts in

Gujarat, India

Hansmukh Seth

Archaeological Explorations in South Rajasthan

K.P. Singh

Water Management at Kanmer

Third Session

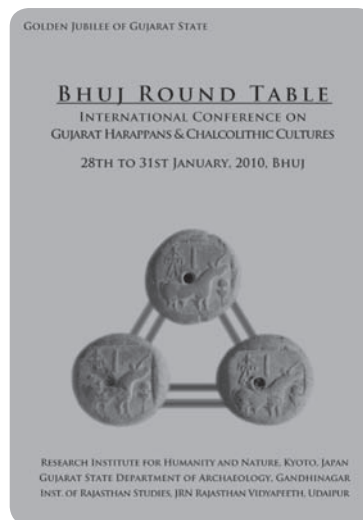
General discussion on Pottery

K. K. Bhan, V.S. Shinde, Ajithprasad, P., Y.S. Rawat

31th January

Excursion to Dholavira

(遠藤 仁)



#### 編集後記

インダス・プロジェクトも3年目がほぼ終了し、ニュースレターも第6号まで発行できました。

編集者が海外出張していることが多く、ニュースレターの発行が遅れたことをお詫び申し上げます。次号は4月中に発行する予定です。多くのご寄稿を期待しております。

最後になりましたが、今号にご寄稿くださった方々に篤く御礼申し上げます。(遠藤 仁)

#### インダス・プロジェクト ニュースレター 第6号

プロジェクトリーダー 長田 俊樹  
編集・発行 インダス・プロジェクト  
発行日 2010年1月25日

〒603-8047 京都府京都市北区上賀茂本山457-4  
大学共同利用機関法人 人間文化研究機構  
総合地球環境学研究所  
URL: <http://www.chikyu.ac.jp/indus/index.html>